

登場人物紹介



いちのせ
一之瀬まこと

tall : 160cm
father : 人間
mother : 獣人 (バスキー種)

営業事務担当。
営業部部長のことが入社時から好き。
発情期持ち(母からの遺伝)。

あさぎり いすみ
朝木同イ尹、墨

tall : 196cm
father : 獣人 (紫種茶)
mother : 獣人 (紫種黒)

営業部部長。喫煙者、愛用は赤マル。
物腰が柔らかく実績もあり、部下からも慕われている。
発情期は毎週。



あずま おうか

東桜花

tall : 147cm
mother : 獣人 (ボム種)
father : 人間

まことの同期であり親友。
人懐こく快明で、弟と妹がいるので面倒見がいい。



部長
あなたに
埋めたい顔
を



獣人と人間とが共に歩んできた年月はもうかれこれ数十世紀にもなる。

小学生の頃、歴史の授業で人間の祖先は「猿人」、獣人の祖先は「犬」という生き物だったのだと習ったのをぼんやりと覚えていた。

人間に地域や見た目、肌の色などによってある程度の種族の区分けがあるように獣人にも種類があり、例えば獣人である自分の母はハスキー種という種族で寒い地域に住んでいた犬の末裔なのだと聞いたことがある。

そしてそんな母と、純正の人間の父との異種婚によって産まれたのが、自分……一之瀬まこと。

性別は男。

平凡に大したイベントもないまま小学校から大学までの学生生活を終え、就活に特に苦労することもなく、あまり大きいとはいえないが同僚も上司も優しい人たちばかりの会社に就職してかれこれ二年。

僕は、入社時と変わらず今日も会社の営業事務を担当している。



「まーこと！ ランチ食べに行こー！」

鈴が跳ねるような元気な声が飛び込んできて、ふいと顔を上げた。

もうそろそろ一区切りつきそうな資料が表示されたモニターの向こう、小さな耳を称えたふわふわの彼女がぴよと顔を出す。

可愛らしく結わえられた三つ編みと桃色のリボンが跳ねた。

目が合ったボメ種の彼女の目がくしやりと可愛らしく細められる。

「桜花、ちょっと待ってね。区切りがいいところまでやっちゃうから」

正面のデスクの彼女は同期の東桜花^{あづまおうか}。

もうかれこれ二年もの付き合いになる彼女は良い意味でパーソナルスペースが狭く、人懐こい性格だ。最初は距離感が近すぎて少し苦手だったのだけれど、お互い唯一の同期であることもあり交流を進めていくと意外にも面倒見が良い面があったり物怖じしない芯がある姿勢だったりが見えてきて、いつしか苦手意識は消えてなくなっていた。

今では何でも相談できる良き友人となった彼女はいつもこうしてランチに誘ってくれる。

編集していたデータを保存してデスクを立つと、待ってましたと言わんばかりに桜花も勢いよく立ち上がった。

まん丸い尻尾が忙しく揺れているのが見える。早く早くと彼女に急かされながら、身軽に財布だけを持って桜花と共にオフィスを出た。

「今日は何にしようかな？ パスタ？ ハンバーグ？ ラーメン？ ちょっと奮発して焼肉っていうのもいいよねー！」

彼女の言葉に相槌を打ちながらふいと隣でスキップ気味に歩く小さな姿に視線を向ける。

ポメ種は基本的に小柄で、隣にいる彼女も例にもれず身長僅か百四十七センチ。

小さくて柔らかそうな手から適度に伸びている爪に乗ったピンク色のネイルが真上にある太陽の光を浴びて輝いていた。

「まことは何か食べたいのある？」

「うーん……僕は特に」

「もー！ そういうこと言ってるからまことはいつまで経ってもガリガリのもやし君なんだよ！ よしつ、じゃあ今日のお昼は焼肉に決定！ 桜花ちゃん奢ったげる！ いっぱい食べなさい！」

「えっ？ いいよ、そんな。自分で払うよ」

「いいからいいから！ ほら、レッツゴー！」

ぷにぷにした柔らかい感触と、ふわふわの綿毛のような感触とが手首を包んだ。

この獣人特有の肉球と、彼女の体を覆うふわふわの可愛らしいベージュの体毛は自分にはない。

だからこそ羨ましくなることがある。

そう彼女に素直に言うとは恥ずかしそうに笑いながら、人間のすべすべのお肌も触ってて気持ちいいし羨ましいよ、といつも返してくれるのだった。

獣人。

文字通り、獣の形をした人。

歴史上の記録によると、平安時代とかその辺から人間とは似ても似つかない二足歩行の文明生物が現れたのが獣人の始まりだと言われている。

桜花に手を引かれながら見慣れた景色を見渡すと、人間も獣人も関係なく交流する平和な世界が広がっていた。

祖父母の時代は何やら人間と獣人との間には蟠りがあったそうなのだけれどそんな面影を感じさせない、いつもの穏やかな風景。

「まこと？ どしたの、ぼーっとして」

「うん。なんでもないよ」

彼女の大きくてまん丸い瞳に、自分の顔が反射した。

ぼんやりとしたグレーの髪と瞳。

ハスキー種である母譲りのそれらを携えているのはどこか頼りなさそうな人間の男。

自己主張が少なく、地味で、根暗。

目の前にいる桜花とは正反対な自分に嫌気が差す。こんなことだから想い人に気持ちの一つも伝えられないんだなあ、と一人勝手に肩を落とすのだった。



肉が鉄板の上で踊る音が鼓膜を揺らし、香ばしい匂いが鼻孔を撫でる。

やはり肉食動物として産まれた以上、目の前で肉が美味しく調理されていく様子を眺めている瞬間は心躍るものだ。

ランチセットの卵スープを啜りながら食欲をそえる赤みがゆつくりとその身を焦がしていくのを今か今かと待っていると、正面に座って同じく鉄板と睨めっこをしていた桜花が我慢ならないとでもいうように赤みが残った……というか殆ど赤いままの肉を持ち上げ、口にぽいと放り込んだ。

「まだ赤くない？」

「だいいょーぶ、だいいょーぶ！」

肉をゆつくりと味わうように噛みながら、恍惚の表情を浮かべる桜花。

くそう、羨ましい。

あまり体の強くない人間に対して、獣人は本人たちが自負する通り生命力が強い。

ちゃんと血抜きなどの処理をすれば基本的には火の通っていない生の肉でも食べられるらしく、居酒屋なんかによく確かになんとなく赤な生肉を食いちぎってビールを流し込んでいる中年の獣人男性なんかをよく見かける。

馬刺しやレバーなど人間が食べられるように丁寧に処理をされた新鮮なものもあるのだけれど、自分は生臭く感じてしまっただけであまり好きではない。彼女たちが曰く、その生臭さがいいそうだが。

「まこと、その辺のお肉、もういいんじゃない？」

桜花に言われて鉄板に視線を落とすと、程よく焦げ目のついた香ばしい匂いを放つお肉が自分を見上げていることに気が付く。

零れ落ちる肉汁が勿体ない。

少し焦りながらしっかり焼けたそれを箸で摘んで
甘めのタレにダイブ。

タレを絡めたらご飯の上でちよっとタレを落とし
て、と。

「いただきます」

甘い肉汁が舌の上でじわりと溶け出してタレと絡
む。

すかさず白いご飯も投入。

甘じょっぱいタレのおかげでご飯の甘みが際立ち、
なんともいえないこの幸福感。

ううん、生きてるって感じ。

焼肉最高。

「あ、ところでさ」

デザートのスアイスマでぺろりと平らげ食後の煎
茶で一息ついていたとき、桜花がふと顔を上げた。

食後だから少し眠そうだ。

かくいう自分も、この後の業務のことを考えると
溜息が漏れる。

ああ、このまま帰りたい……。

「いつ部長に告白するの？」

突然の爆弾投下に噁っていた煎茶を吹き出す。

飲み下しかけていた煎茶は急に進路を変えて気管
に飛び込んでいった。

激しく咽る自分を尻目に、桜花は小さく呆れたよ
うに息を吐いて目を細める。

「まことから部長が好きだって聞いてからもう二年
近く経つよ？　いつまでウジウジしてるの」

「う、……だ、だって……」

「もう。まこと、いつもでもってだって」しか言
わないじゃない。部長みたいなタイプは言わないと
気付いてくれないよ？　あの人、鈍そうなもの。ま

このこと、きっと可愛い後輩ぐらいにしか思っていないよ」

「それは、そうなんだけど。でもまだ自信が……」

「いつもそればかり。言っとくけど、まこと、レベル高い方なんだからね！ 顔可愛いし華奢だし。でも歩くときも座るときも猫背気味だからそれは直した方がいいと思う」

からん、と解けた氷がグラスの中で崩れた。

薄い烏龍茶が少しだけ残ったそこには弱々しい自分の姿が映っている。

「兎に角、あの手のタイプはガンガン攻めてこそよ！ ってことで、どうせこのままじゃ進展なんてしないだろうから、部長と飲み会セッティングしといてあげたからねっ♪」

「……………え？」

いつもと変わらない可愛らしくて懐っこい笑みを

浮かべる彼女が、今回ばかりは悪魔のように見えた。



営業部部长、朝桐伊墨。
あさぎり いすみ

齡四十後半。

柴種の獣人である彼からはいつもコーヒートタバコの匂いがする。

物腰が柔らかく、穏やかで落ち着いた大人な姿勢に十年來の顧客も少なくはない。

それでいて時折、営業事務担当である自分や桜花に営業先で買ったお土産を差し入れしてくれたり、労いの言葉をかけてくれたりと、彼がいる営業部に配属されて挨拶をしてから、彼に憧れるようになるのに時間はそうかからなかった。

というか今思えば、配属されて初めて挨拶をしたときの彼のくしゃっとした笑顔にもう惚れていたよ

うな気さえする。

「戻りましたー」

元気に片手を上げて営業部オフィスに飛び込んだ桜花に続いて、入り口で頭を下げてから自分の席に腰を下ろす。

座りなれたオフィスチェアから伝わってくる優しい揺れが、甘たるく睡魔を誘った。

ストレッツも兼ねて体を伸ばし眠気に退場を願うが、逆効果だったらしい。

あー、ぼんやりしてきた。

やばい。

パソコンのモニターの向こう側で桜花が大きく口を開けて欠伸をしているのにつられて自分も小さく欠伸を零した。

「眠そうなところ申し訳ないけれど、急ぎの案件をお願いしてもいいかな？」

視界の端からタバコの匂いが滑り込んできて肩が跳ねる。

心臓が口から飛び出してしまうかと思った。

振り返ると優しく見下ろしてくる円らな瞳と目が合う。

「あ、す、すみません……」

「はは。大丈夫だよ。この時間は眠くなってしまうよな。私もこの後の会議で寝ないか不安だよ」

部長はからからと笑いながら、よいしょ、とこちらに視線を合わせてしゃがみ込んだ。

ふわりとタバコとコーヒーの香りがする。

次いで、ちよつとだけ武骨な石鹸の匂い。

「それで急ぎの案件なんだけれど、共有フォルダに入れてあるのを開いてもらえるかい？ 今日付けのフォルダ」

「はい。えっと、……………あ、これですか？」

「そうそう。一緒に資料を入れてるから、過去十年分のデータをグラフ化しておいてほしいんだ。今日十七時に約束してるクライアントから急な要望変更があつてね……十六時半までにお願いできるかな？」

今日の他の業務はアポにまだ期間があるものばかりだから月曜日以降でも大丈夫だし」

「わかりました。このくらいなら間に合うと思います」

「本当かい？　ありがとう、頼むよ」

安心したように小さく息を吐いた彼は姿勢を戻す。

ぼき、と膝から音が聞こえた。

運動不足かな。

「急な変更だったからさ。すまないね、手間をかけて」

「いえ。大丈夫です。すぐやりますね」

どうせもう週末だし、あと数時間仕事に真剣に打ち込むくらいなんてことない。

それに部長に声をかけられたことで眠気が吹き飛んだし、部長直々にお願いを受けたとあつては頑張らない他もないだろう。

よし、と資料を開いたところで頭の上に包み込まれるような重みを感じた。

ぷに、という柔らかい感触と高めの体温。

「え、っと。部長？」

「それじゃ、よろしく頼むよ」

……撫で、られた？

頭に手が乗っただけみたいな感じだったけど、それだけでも十分顔が熱を持つ理由になった。

真っ赤になった顔を見られないよう小さく縮こまる。

ふと顔をあげると正面に座っている桜花がにやにやと意地の悪い笑みを浮かべているのが見えた。

ふるふると首を振り、デスク脇に置いていた飲み物を飲んでクールダウンしてから改めて画面に視線を戻す。

しかし急な要望変更とは、随分と迷惑な話だ。

これが週末じゃなければ内心はイライラしていたに違いない。

「おっと、そうだ。東くん、一之瀬くん。今日の夜だけど、私は営業先から直接向かうから駅で待ち合わせにしないか？」

今日の夜？

首を傾げていると、桜花が花の咲くような笑顔を浮かべて元氣よく立ち上がった。

「はい！ 了解です！」

なんだなんだ。

自分のあずかり知らぬところで一体何の約束がさ

れているというんだ。

ぽかんとしている間に彼は名前が書かれたマグネツトを「会議」の欄に移動させ、何やら色々資料を抱えて営業部オフィスを出ていった。

今は他の営業の人もお飯だったり営業だったりに出ていて不在。

自分と桜花の二人だけが残されたオフィス内はがらんとしていて、静寂が頬を撫でる。

「えっと……桜花？」

「んー？」

「今日の夜って」

「言ったじゃん、飲み会セッティングしといたって」

「いや、言ってたけど……まさか今日なの?！」

「今日だよ？ あ、ちなみに、あたし今日仕事終わりそうになくて残業の予定だから二人で行ってきだね！」

……………んん?!



急展開だ。

予想だにしていけない急展開だ。

まさか何の心構えもないまま行き成り部長と二人きりだなんて。

桜花のお節介には今まで何度も助けられてきたけれど……今回の有難いようなそうでもないような。残業とか言いながら急ぎでない資料をのんびり作りつつお菓子をつまんでいる桜花をオフィスに残して電車に乗った。

いつもの帰り道とは逆方向、仕事終わりのサラリーマンで賑わう車内が揺れるたびに心臓の鼓動が大きくなっていく。

待ち合わせの駅に近付くにつれて現実味が増して

いき、同時に不安が背筋を駆けた。

少しでも気を紛らわせようと聴いていた音楽に紛れて、チャットアプリの通知音が鳴る。

ふとスマホを見ると、桜花の名前が表示されていた。

――やっほー！ 守備はどう？ ー

可愛らしいスタンプと一緒に送られてきた一文。
守備って……。

――まだ電車だよ ー

――ありや？ まだそんな時間？ ー

――桜花、仕事終わったの？ ー

――うん。今会社出たところ ー

――お疲れ様 ー

――ありがとー！ まこともお疲れ！ ー

本当は今からでも合流してほしいがそれでは彼女

の気遣いが無駄になってしまおうし……なんて理由を適当につけて、今からでも、まで入力したメッセー
ジを消した。

「じゃあ頑張ってるねー！ 月曜日、成果聞かせてね」

ハート形のスタンプが送られてきたのを最後に、彼女からのメッセージは途絶える。

小さく息を吐いた次の瞬間、次の停車駅のアナウンスが流れた。

持っていた鞆を抱え直してドアの近くに寄る。

いつの間にか窓の向こうは武骨にビルが立ち並びオフィス街からネオンばかりの煌びやかな街並みにお色直しをしていて、これからそんな華やかな場所に飛び込むとしているとは思えないほど不安げな顔をしている自分と窓ガラス越しに目が合った。

何を話せばいいんだろう。

そういえば部長と仕事以外の話したことないかも。

どうしよう、大丈夫かな……。不安で押しつぶされそうになっていると、再び手に握ったままのスマホが震えた。

画面に映し出されたのはメッセーアプリの通知。その送り主は……、

「ぶ、部長っ?!」

思わず出てしまった声に、はっとして口を塞ぐ。

周囲を見渡したらばかんとした顔をしたサラリーマンと目が合った。

そんな彼に小さく頭を下げて目を逸らし、今にも口から出ていってしまいそうなほど暴れている心臓を宥めつつスマホの画面と向き合う。

配属時、緊急連絡用にと登録した部長のアカウント……基本的に仕事関係は社内メールあるいは社内電話で連絡をくれていたからトーク画面は真っ白だった。

つい先程までは。

「すみません。商談が長引いて、少し遅れます」

恐る恐る開いた真っ白なトーク画面に浮かんだメッセージに拍子抜けする。
なんで敬語なんだろう。

「わかりました。僕はもう着くので、駅で待っていますね」

「了解。どこか入っていていいよ」

目の前で電車のドアが開く。

人の波に少しだけびくびくしながら改札を抜けた。
流石、華の金曜日。

繁華街の最寄り駅だということもあり人通りが多い。
とりあえず邪魔にならないよう脇に避けたが、さ

てどうしたものか……。

部長の言う通りどこかに入っていたほうがいいのかな、なんて思いながらとりあえず人込みを避けるために駅を出て、駅の目の前に設置されている少し高めの花壇の淵に腰を下ろした。

土と葉との青臭さに交じって花の蜜の優しい匂いがする。

もう春だ。

流石に夜は時折吹く風が少し冷たいけれど。

「日没の時間も遅くなってきたなあ……」

時刻は十九時半。

紺色と橙色とのグラデーションを背景に喧騒がネオンの海を漂っている様子をただぼうっと見つめる。
仕事終わりにこんなところに来たの久しぶりだな。
桜花と遊ぶ時は、仕事終わりは基本的に職場付近だし、休みの日にも繁華街よりはショッピングセンターやお店とかが多い方に行くし。

アフターファイブを数時間過ぎた今の時間帯、ど

うやら既に一次会を終えた人たちも少なくないよう
で時折前を通り過ぎる騒がしい集団からアルコール
の匂いが漂ってくる。

繁華街は空気だけで酔えてしまいそうで、あまり
お酒を飲まない自分には少し場違い感があるけれど
足音や笑い声が入り混じったちよつとだけ下品な雑
音はすごく心地いい。

聞き入るように少しだけ目を伏せたその時、ネオ
ンの光を遮って視界に大きな影が落ちてきた。

肩で息をするその影は、頬を伝う汗をぐいと拭う。

「一之瀬くん！ すまない、待たせたね」

ジャケットを袍と一緒に脇に抱えた彼は少しだけ
煩わしそうにネクタイを緩めた。

妙に艶めかしいその様子に心臓が跳ねる。

と同時に、行儀よく締められていた襟元から零れ
落ちるようにふわふわの毛が飛び出したのが見えた。
うわ……あそこ、顔埋めたい。

大人らしさが滲み出る姿に見蕩れてぼかんとして
いるとネクタイを緩めた手がそのままゆつくりと近
づいてきた。

すり、と彼の手の甲が頬を滑る。

少しだけ固めのしつかりした毛質が柴種の特徴だ
と聞いたことがあるけれど……全然違うじゃん。

ふわっふわで触り心地最高。

お祖母ちゃんの家敷いてあるちよつと高い絨毯
みたい。

わー、気持ちいいー。

……えーつと。

今、これ何されてるの？

どういう状況？

「こんなに冷たくなって。どこかに入っていると言
ったのに」

予想外の出来事にフリーズしている自分を置いて
けぼりにして、彼の体温はゆつくりと離れていった。

しゅんと力なく垂れていた彼の耳が何かを探すようにぴくぴくと動く。

「あれ？ 東くんは？」

「桜花は残業になっちゃったらしくて」

「？ そうなのか。珍しいな、東くんが残業だなんて」

「そうですね……あはは」

「まあでもそういうことなら仕方ないな。じゃあ今日

日は二人で飲もうか」

「は、はいっ」

良かった。

今日は解散にしようとか言われなくて。

部長の性格からしてそんなことをいう人ではないとは分かっているんだけど、そこはまあ恋する故の弊害ともいえるもので、相手を信じたいと思う反面もし相手にこんなことを言われたら、されたらどうしようと考えてしまうのは正常な思考回路だろう。

多分。

「それで、どこに行こうか」

「……へ？」

「東くんに誘われただけで店とかは何も聞いていないんだが、一之瀬くんは何か聞いているかい？」

「え？ 僕は何も……いつも桜花と飲む時も予約はしないで行き当たりばったりなので」

「そうなのか。若いのになかなかチャレンジャーだね」

部長と二人で並んで繁華街を歩く。

時折すれ違うカップルや夫婦を見ると今の自分たちはどう見えているんだろう、なんて思ってしまう。

「君たちのいつも通りに従って適当にどこかに飛び込んでもいいけれど、今日は金曜日だからね。目につくところはどこも混んでそうだし、私の行きつけでもいいかい？ 君のような若い子を連れていける

ようなお洒落な店ではないんだけれど……」

「そ、そんなつ、全然大丈夫です！ それに部長の行きつけのお店、行ってみたい、です」

必死にかき集めた勇氣はそんなに多くはなく、後半は声が小さくなつていったけれど言葉自体は届いてくれたみたいで、彼は嬉しそうに頬を緩めた。

「じゃあ、行こうか」

そういつて歩き出した部長の広い背中を追いかけていくと、景色は煌びやかな大通りから徐々に提灯や小さな看板が立ち並ぶ静かな裏道に変わっていく。数十分ほど歩いた頃だろうか、部長が指したのは赤提灯と青い暖簾を引っさげた木造の建物。

店名すら書かれていない質素な店構え……と思うたら、足元にある電飾スタンド看板に「たるま」と書かれているのを見つけた。

なるほど確かに、桜花とは絶対に入らないタイプ

の店だ。

ガラス張りのドアの向こうから煌々とした明かりと野太い笑い声が漏れている。

こちらが尻込みしていることに気付いたのか、視界の端にひょいと部長の顔が滑り込んできた。

不安げに眉が垂れている。

「やっぱり店、変えようか？」

「い、いえっ！ 大丈夫です！」

なかなか一見には厳しそうなお店だが、隣に部長がいるだけで大分心強い。

少しだけ申し訳なさそうな部長に続いて恐る恐るお店に足を踏み入れた。

途端、ぶわりとタバコの匂いがして、次いで母親を彷彿とさせるような、優しい声色の「いらっしやいませ」が耳を撫でる。

カウンターの向こう、静かに佇んでいるのは割烹着に身を包んだ綺麗な人間の女性。

目の色素が少しだけ薄いような気がする。

奥にあったボックス席に部長が腰を下ろしたのに倣って、自分も正面に腰を下ろす。

と同時に水の入ったグラスとおしぼりが目の前に置かれた。

「なんにします?」

差し出されたおしぼりは温かくて、思わずほう、と息を吐く。

「うーん、そうだな。じゃあとりあえず瓶ビールと

……一之瀬くんは?」

「あ、ええと」

慌ててメニューを手にとって開く。

お酒のページは……あった、最後だ。

うーんと、ビール、日本酒、焼酎、ハイボール、ワイン……。

えっとカクテルは……もしかして、ない……?

どうしよう困った。

カクテルしか飲めないのだけど。

「メニューにないものでも仰って下されば作れますよ」

「ほ、本当ですか? じゃあえっと、カシスオレングジ……とか、できますか?」

「はい。大丈夫です」

にこにこしながら頷いてくれた女将さん。

よかった。

「すぐお出ししますから、ちよっと待っててくださいね」

優雅に頭を下げてカウンターに戻っていった彼女を見送りながら、ほっと息を吐く。

「一之瀬くん、食べたいものはあるかい？　好きなものを頼みなさい」

「えっと……うーん」

手に握ったままだったメニューに改めて目を落とす。

年季の入った色褪せた紙面、しかもスピン付き。後から少しずつ増えたのか手書きのメニューがラミネート加工されて数枚挟まっている。

えっとお刺身、てんぶら、串、……わ、グラタン

？

それにオムレツまで……すごい、洋食もあるんだ。居酒屋というよりは家庭料理って感じなのかな。あの女将さんが作るグラタン、美味しそうだなあ。カウンターの向こうから漂う懐かしい香りに絆されて、入店前に感じていた不安はいつの間になくなっていく。

そもそもお酒に強くないということもあって普段はあまり飲まないのだけれど女将さんが作ってくれ

る料理もどれも美味しくて自然とお酒が進んだ。

体が火照る。

意識がぼんやりとして、珍しく随分酔ってるな、なんて呑気に考えていると不安そうな部長の顔が飛び込んできた。

「一之瀬くん、顔が赤いけれど大丈夫かい？」

「うーん……へへ、ちよっと酔ってます。いつもはこんなに飲まないから」

部長との飲み会は最初こそ緊張していたけれど、美味しいお酒とご飯とに背中を押されるように意外と色んなことを話せたし部長が聞き上手なのもあって随分と自分ばかり話をしてしまったような気がする。

それも結構プライベートな。

「あまり無理してはいけないよ。酒は呑んでも飲まれるな、だからね」

「ふふ、わかってます」

彼のおじさんくささに思わず笑みが零れる。

こんなに格好良くて、スマートで、年齢を感じさせないのにやっぱり言動には年相応な感じが出るんだ。

まあ、そこも含めて彼のこと好きなんだけれど……。

「部長」

「ん？ どうしたんだい？」

「部長って、お付き合いしている方とかいないんですか？」

はつきりとしてない意識の中で、正面に座る彼が困ったように笑ったのだけがわかった。

いつもは自信ありげにぴんと立ったままの耳が少しだけ傾いている。

「はは。恋人なんてもう暫くないいよ。それに、もう、諦めている」

「……え？」

「私もいい年だしね。これから誰かとうこう、っていうのは考えていない」

ぐい、と御猪口を煽った彼。

困らせてしまっただろうか……前後の話に全然絡んでなかったし、きつと不躰だっただろう。でも……。

「そ、そうなんです。でも、部長すごく素敵ですし……ほら、告白とか、されないんですか？」

止められなかった。

お酒の力を借りた今しか無いと、ここを逃したらもう彼に近付くことはできないかもしれないと、なんとなくそう思ってしまった。

恐る恐る発した言葉に、彼は数秒の沈黙。

やはり失礼だっただろうか。

何か気に障っただろうか。

このお店に入ってから初めて訪れた静寂に思わず青くなり、訂正しようとして口を開いた瞬間、目の前に座った彼の口が先に開いた。

「告白かあ。そんなの、いつが最後だろう。学生の時とかだろうなあ。もう三十年も前の話だ」

大口を開けて笑う彼。

きらりと鋭い牙がお店の暖色の照明を浴びて光った。

少しだけ目を細めた彼は徳利を覗き込み、最後の一杯を御猪口に注ぎ込んで軽い音のするそれをテーブルに置く。

「私のことは兎も角、一之瀬くんはどうなんだい？
まだ若いんだから、浮ついた話の一つや二つあるだろう？」

ぐい、と一息で御猪口を空にした彼はカウンターに向こうで何やら調理をしていた女将さんに熱燗を注文した。

それにしてもすごい飲みっぷりだ。

もう清酒を何杯も飲み干しているというのに表情一つ変わらない。

「……ああ、最近はどういうのもセクハラになってしまうだったかな。すまない、忘れてくれ」

「い、いえ、その、大丈夫です」

女将さんがテーブル脇にやってきて、目の前に湯気の上る徳利が置かれる。

途端、気化したアルコールの匂いが鼻先を突き上げて、脳裏がぐらりと揺れた。

「好きな人は、います。……でも、多分相手は僕の気持ちには気付いていなくて。いつも僕が勝手に」

見てるだけなんです」

まさか本当に匂いだけで酔ったとは思っていない。けれど、酔ったと自分に言い聞かせるには十分だった。

そうでもしないと、次の言葉をどんな声色で紡げばいいのか分からなくなってしまうそうだったから。

「僕、鈍くさくて頼りがいもないし……仮に、こんな僕に告白なんてされても、きっと相手は、迷惑だろうって」

女将さんが出してくれた温かいお茶が入った湯飲みに自分の顔が反射する。

自分から言い出した言葉に今にも泣きだしてしまいそうになっているその顔には否定してほしいとありありと書いていた。

「そんなことはないさ」

はっとして顔を上げる。

言わせてしまった。

はつきりものを言ってくれる桜花ならまだしも彼にこんな面倒くさいことを言ってしまった、しかもそれを慰めさせてしまった。

上司という立場、そして会社の人間であるという立場上、「そんなことはない」という返答以外の選択肢は殆どないに等しいだろう。

当たり障りのない、社交辞令。

慌てて茶化そうとしたが、見上げた先にあつた彼の顔は真剣そのもので、思わず言葉を吞む。

「君はよく周りを見ている。フォローも上手だ。相手を思いやるが故に自分の気持ちを飲み込んでしまうのが玉に瑕だが、君はとても優秀な人だよ。迷惑だなんて思うはずないさ」

「……そう、でしょうか」

「ああ。君の直属の上司である私が言うんだ。間違

いない。だから、自信を持ちなさい。ね？」

にこり、と細められた彼の目に情けない表情を浮かべた自分が反射した。

思わず真っ赤になった顔を見られない様に下を向く。

やっぱり僕は、この人のことが好きだ。



お店を出ると、ひゅう、と冷たい風が頬を撫でた。火照った頬から少しずつ体温が攫われていって、それに引きずられるように酔いも少しずつ抜けていく。

ふと横に視線を移すと、部長が大きく伸びをしてるのが見えた。

「すみません。奢ってもらっちゃって……次は僕が」

「いいんだ。私は上司だからね。部下は黙って奢られていなさい」

力強く微笑む部長の口元から八重歯が覗く。

思わず心臓がきゅんと縮んだ。

ほんの少し残ったアルコールのせいでふわついた視界の中、彼の顔だけがくつきりと見える。

優しく皺を刻んだ目元、タバコの匂いが染みついたシャツ、時折ぴくぴくと動くふわふわの耳に少しだけ乾燥した肉球。

そのすべてが……、

「好きです……」

「……え？」

……え。

首を傾げる彼とはつちりと目が合う。

待つて、もしかして今、声に出てた？

その瞬間に酔いは少しも残らず吹き飛び、くつきりと街ゆく足音も喧噪も、周囲の視線も、意識の中に滑り込んできた。

「あつ、えっと……！ その、こういう、お酒飲んだ後の風つて、好きだなあつて……！ あ、あはは……！」

ビルの隙間から零れ落ちている星の少ない夜空を指しながら彼の顔を恐る恐る盗み見ると、指した方に視線を向けて納得したように、ああ、と呟く。

「わかるよ。ひんやりして気持ちいいよね」

「そ、そうですねー！」

誤魔化せた、かな……？

できればもう少し一緒に居たかったけれど勿論そんな可愛らしいおねだりなんてできるわけもなく、

今日のところはそのまま解散。

遠くなつていくネオン街がなんだか恋しい。

たった数時間居ただけなのだけれど。

なんとか家に帰りつき上着を脱いでそのままベッドに飛び込む。

自分の家つてこんな匂いだったつけ、なんて思いながら大きく息を吸い込むとどこからかタバコの匂いがする。

シャツだろうか、それとも上着？

微睡んでいく視界に慌てて体を起こし、シャツを脱いだ。

寝巻に着替えて改めてベッドに飛び込み直す。

本当はシャワーでも入りたかったけれど残念ながら意識が持ちそうにない。

それに、もう少しだけ彼と同じ匂いを纏っていたと思うことぐらい、きつと許されるだろう。

ほんの数時間、正面に座っていた想い人の色んな表情を思い出しながら、そつと目を閉じた。

「意気地なし」

「……うう」

「尤も。」

返す言葉もございません。

目の前に座る桜花からの齒に衣着せぬその感想に、
がつくりと肩を落とした。

時刻は午後三時過ぎ。

日曜日ということもあり、カフェ内はざわついて
いて可愛らしい制服に身を包んだウェイトレスさん
がぱたぱたと店内を走り回っている。

部長と二人で飲みに行った翌々日。

桜花に誘われて最近できたばかりのカフェに来て
いた。

「まあでも、この二年間の進展のなさを考えたら頑
張った方か……。ところで部長にそのあと連絡した

？」

「ああ、うん。一昨日は帰ってそのまま寝ちゃった
から、昨日の朝に」

「ちゃんとまた行きたいですって送った？」

「えっ」

「あー、お礼だけ言って終わったんでしょ。駄目だ
よ。そこは最後に「また誘ってください♡」ぐらい
送らないと！」

最後のハートは兎も角、確かにそのくらいのメッ
セージを送っても良かっただろうか。

朝になって完全にアルコールが抜けきってすつき
りとしたことで彼の前で情けなく酔う自分の恥ずか
しさに耐えられず、簡単にお礼を送信しただけにな
ってしまった。

そういえば既読が付いたかどうかすら確認してな
いな……。

「誘ってくださいって……誘ったのは桜花でしょ」

「あ、そうだった。でもあたしの推測だけど、このまま押せばイケそうじゃない？ 部長」

「ええ？ なんて？」

「だってさ、まことに好きな人いるかって聞いてきたんでしょ？ 多少は興味持ってくれてるってことじゃない」

「話の流れで聞いてくれただけじゃないかな……

？」

「いやいや、興味ない人間の恋愛遍歴なんて普通は気にならないでしょ。たとえ今が『不田』だったとしても無関心より全然脈ありだと思っただけだ」

「ずず、ともう殆ど残っていないジュースを啜り、口寂しそうにストローを噛みながら桜花が窓の外に視線を移す。

「ま、焦る必要ないでしょ。ここ二年の間、部長に恋人の影が見えたことはなかったし、そういう相手を作る気はないっていうのは本心だと思うよ」

にぱっと花の咲くような笑みを浮かべた彼女。

「頑張りなね。せつかく二年間もあつたための気持ちなんだから」



「はあ……」

やってしまった。

すっかり暗くなった駅までの道を一人で歩く。

あと二時間ほどで日付が変わってしまう時間帯。

どうしてこんな時間に一人でとぼとぼ歩いているのかというと、自分が作成した書類に記載されていた日付が間違っていたから。

入社以来、何度もミスはしてきたけどこんなに

大きなミスは初めてだ。

幸いなことにまだ日付に余裕があり修正が可能だったことと取引先と部長が良好な状態を築いていたことにより大事には至らなかったが、もし気付くのがもう少し遅かったら途方もない損害を出してしまっていただろう。

「も、申し訳ありません、部長！」

「いいんだ。私も君に押し付けて確認を怠っていたからね。私も悪かった」

「そんな……っ、僕がちゃんと確認していれば……」

「大丈夫。そんな顔をしないで。君が気付いてくれたから損失を出さずに済んだわけだし、お礼を言いたいくらいさ」

部長はそう言うってくれたけれど、そもその話、日付を間違えていたのは自分だ。

自分ももっとしっかり確認していれば部長が先方

に頭を下げに行く必要はなかったはず。

申し訳なさに胸が押し潰されそうだ。

過ぎたことは仕方ないとはいえ、悔やまずにはいられない。

それから不安になって、業務時間終了後に明日以降の納品、発注、アポイントメントの日付などをすべて確認していたらこんな時間になってしまった。

部長も桜花も定時になっても立ち上がりとうしない自分をずっと心配してくれていたが、流石に付き合わせるのはいし訳なかったので桜花には早々に帰ってもらった。

部長はアポがあるからと営業部オフィスで不安そうに出ていったきりだ。

少し捻くれているけれど慰められると猶更自分を情けなく思ってしまうので誰もいないオフィスで確認作業に没頭できたのは有難い。

部長がわざわざ戻ってきてくれては申し訳ないのどトークアプリで帰宅する旨を連絡してオフィスを出た。

「あーあ……やっちゃったなあ」

桜花どころか部長や他の営業の方にも迷惑をかけたしまった。

今日一日そのフォローに追われて今日の仕事、殆ど桜花に任せちゃったし……今度ご飯を奢ろう。

それに明日からより一層、気を付けなければ……。よし、と決意を新たにしたその瞬間、心臓が一瞬動きを止めた。

息ができなくなり、視界がぼんやりと霞む。

次いで心臓が体内を激しく暴れまわっているような動悸に襲われて膝から力が抜けた。

横断歩道のど真ん中に崩れ落ちたと同時に周囲の音は消え去り、ただ自分の心臓の音だけが脳裏に響く。

やばい。

どうして……つい先月も来たばかりなのに。

視界の端で緑色だった信号が点滅して、赤に変わ

る。

このままでは危ないというのはわかっているけれど、体が動かない。

呼吸をするのですら精いっぱいだったましいクラクションと少しずつ迫ってくる自分の数倍も大きな鉄の塊を見つめた。

ぼんやりとした意識のまま、苦しさに悶えながら目を瞑ることもできず、ただただ迫りくるライトを眩しいと思うことしかできない。

「一之瀬くん！」

少し遠くて聞きなれた声がしたと思ったら、ぷつり、と音を立てて意識が途切れた。



「……?!」

柔らかい感触、石鹸の良い匂いと紙の本の匂い……初めて感じるそれらに意識がゆっくりと覚醒していく。

目の前に広がった綺麗な天井に思わず体を起こした。

ぐらり、と視界が歪む。

吐き気が腹の奥から湧き上がってきて、思わず口元を押さえた。

目を閉じて深呼吸……うん、収まってきた。

ふいと部屋を見渡すとベッド脇のサイドテーブルには自分の持ち物が置かれていて、ほっと一息。知らない景色だ。

えっと……どうなったんだっけ。

なんでこんなところにいるんだろう。

というか、ここはどこだろう？

現状が飲み込めず首を捻ったその時、部屋に唯一あったドアのノブが音を立てて回り、蝶番が軋む音

がする。

スリッパの先がドアの向こうから飛び込んできて、次いで、聞きなれた声。

ふさふさの手が握っているお盆の上には飲み物が入ったコップが載っていた。

「お、目が覚めたか。よかった。体調はどうだい？」

……………。

折角喉の奥に押し込めた吐き気が混みあがってくる。

もう一度抑えることは、到底できそうになかった。



発情期。

獸人特有の、人間でいう女性の月経のようなものだ。

症状には個人差があり、性欲が増すだけの人もいれば立てなくなるほど体が疼いたり頭痛や吐き気などの酷い体調不良を伴う人もいる。

人間は月経があるのは女性だけだが、獸人は性別に関係なく発情期があり、周期にも勿論個人差が出る。

数か月に一度という人もいればひと月に何度も来る人もいるのだ。

そして大きな特徴として、遺伝する性質を持つということ。

数十年前まではあまり良い顔をされなかった異種婚、つまり人間と獸人とが結婚することが一般的に浸透してきた近年、見た目は人間でありながら獸人の性質を親から受け継ぐことも決して不思議ではない。

逆もまた然り。

かくいう自分も酷い発情期持ちの母からそれを完

壁に受け継ぎ、発生周期は不定、頭痛、めまい、吐き気を伴うといったような、ちよっと……いや、かなり重めの症状に毎回苦しめられている。

しかしこれだけ重いのは決して少数派ではなく一定層存在し、仕事に支障が出してしまうということもあり、近年では通常の有給や忌引きなどの特別休暇の他に、体調不良用の休暇が支給される会社も増えてきた。

勿論、うちの会社にも導入されている。

だから明日以降の仕事は気にしなくていい、のだけれど……。

「すみません……部長……」

手に持ったスポーツドリンクのペットボトルが、ぱき、と音を立てる。

ベッド脇の椅子に腰かけた部長は困ったように笑った。

「もういいから、ゆっくり休んでなさい」

数十分前、猛烈な吐き気に耐え切れそうになく、咄嗟の判断でベッドは汚すまいと身を乗り出した。それが果たして最善の判断だったかと言われれば怪しいけれど。

目の前に広がったびっぴかびかのフローリングに罪悪感も一緒に込み上げてきたが結局押さえることはできず、そのままほとんど何も入っていなかった胃の中身をすべて吐き出してしまった。

部屋中に響いた部長の悲鳴に真っ青になったが、どうやら急に嘔吐したことを心配してくれた故の悲鳴だったようで服の裾が汚れるのも厭わず駆け寄ってくれた彼に本当に申し訳なさしかない。

挙句、シャワーまで借りてしまった。

シャワーを借りた後すぐに帰るつもりだったのに何故か再びベッドに寝かされているし……。

「メッセージは見たんだけれどね。たまに警備員さ

んが忘れていることがあるから営業の帰りにオフィスの施錠だけ確認しようと思って会社に寄ったんだ。どうせ通り道だったし。そうしたらオフィスの近くの横断歩道のど真ん中にいる君を見かけて……足取りも覚束ないし顔は真っ青だし、本当に焦ったよ」

彼の眉がくしゃりと歪んでいる。

相当心配してくれたのだろう、スーツを着たままの彼に頭を下げた。

「ありがとうございます……ご心配おかけしてすみません」

「いいんだよ。何事もなくてよかった。東くんも心配していたよ」

「え、桜花が？ どうしてこのことを？」

「実は君を保護した後に家まで送ってあげようと思つて東くん君の家の住所を知らないか聞いてみたんだ。そしたら知らないと言うから……もう遅い時間だったから病院も開いてないし、とりあえず私の

家に連れてきてしまった。すまないな、許可もなく」

「いえ、大丈夫です。むしろすみません」

……桜花、家の住所知ってるはずんだけどなあ。

「話には聞いていたけれど、君の発情期は本当に酷いな。お母さんも辛そうだったと言っていたよね」

そんな話、部長にしたっけ……。

そう一瞬考えてはっとした。

先日の飲みの席だ。

本当に随分プライベートな話を一方的に部長に聞かせてしまったんだなあ、と恥ずかしさで縮こまる。

「東くんが明日迎えに来てくれるらしいから、一緒に病院に行っておいで。抵抗があるかもしれないが、発情期は薬で幾分か良くなる。保険も効くし、薬を処方してもらった方がいい。毎回これでは辛いだろ

う？」

確かに、発情期の抑制剤は基本的に産婦人科で処方してもらうので男性には敷居が高い。

一度処方箋を貰えば、その情報を元にネット注文できる仕組みも最近ではきつつあるけれど。

「ありがとうございます。でも部長……僕、もう大分よくなったので、帰れます」

「いいや駄目だ。覚えていないかもしれないけれど、君は横断歩道のど真ん中で倒れたんだよ。そんな子を一人にするなんて危険すぎる。今日は泊っていきなさい。それにもう遅い。こんな深夜に部下を放り出すほど私は鬼畜じゃないつもりだが？」

部屋にある時計はもう深夜三時頃を指している。確かに今から帰るのは少し大変だけれどタクシーを捕まえば不可能ではない。

「でも申し訳ないです……仕事でもご迷惑をかけた
うえ、こんな……」

「それはそれ、これはこれ、だ。仕事のミスをした
からといって上司に甘えてはいけないわけじゃない
だろう？ 気にしすぎだよ」

今からでも帰ろうと体を起こしたけれど、両肩に
部長の手が乗って思わず動きを止めた。

普段は柔らかい目元が少しだけ鋭く細められてい
る。

そのまま肩に圧力がかかり、折角持ち上げた体は
再び真っ白いベッドの上に戻ってきた。

触れられている肩がじんわりと熱を持つ。

獣人特有の高温温に釣られて自分の体温も上がっ
ていくような気がした。

「いいから、ほら。横になっていて」

優しく囁かれたその声に心臓が大きく音を立て、

ぞくぞくとした感覚が背筋を駆けあがる。

力が抜けて、言われるまま、されるがまま、柔ら
かいスプリングに体を預けた。

自分にかかる彼の影に体が疼く。

喉が渴いて呼吸が浅くなり、腹の奥がむずむずす
るような感覚に顔が熱くなっているのが分かった。
どうして。

これまではこんなこと、なかったのに。

今、どうしようもなく彼に触れたい。

もっと触れてほしい。

触れて、それから。

「一之瀬くん？」

部長の困ったような声で、現実引き戻された。

彼を求めて空中を彷徨っていた右手をそっと元あ
った場所に戻す。

「顔が赤いけれど、大丈夫かい？」

「だ、大丈夫です」

できれば帰りたいと思った理由は迷惑をかけてしまうからだけではない。

なんとなく彼が部屋に入ってきた時から違和感があった。

小さいけれどじりじりと焼けつくような、心臓のその向こうにあるところがきゅんと縮むような、小さな違和感。

このまま、この人の家でこの人の匂いに包まれていたら、自分がおかしくなってしまうそうで。

「そうか。無理はいけないよ。もう寝なさい。いい子だから」

優しく触れられる度、声をかけられる度、彼にその気がないことを痛感する。

勿論、発情期にかこつけて迫ってくるような人ではないことは重々分かっているし、そういう硬派な

ところが大好きなんだけれども、想いを寄せている立場からすると多少狼狽えてほしい……なんて。

「私は隣の部屋で寝てるから、何かあったら遠慮せず呼ぶんだよ」

そういい、彼は部屋を出ていった。

「……っはあ、」

一人になったことで緊張が緩むとともに思わず漏れた吐息には妙に熱が籠っていて、思わず口元を押さえる。

母が発情期に苦しんでいる様子は幼い頃からずっと見てきた。

発情期中はずっと真つ青な顔をしていた彼女を思い出す。

そんな母の性質を受け継いだ自分がまさか発情期の影響で性欲が増すだなんて思ってもみなかった。

母の姿を見ていたからこそ発情期は体調不良を伴うだけの無駄なものだと思っていたけれど、そもそもの起源は繁殖の為であるということに二十数年生きてきてやっと納得がいく。

ただ、その想い人との繁殖は絶対的に不可能だけれど。

恐る恐る、先程から疼いて仕方がない自分自身に、そつと服の上から指先だけで触れてみた。

「ッ……ん」

自分だって成人済みの男だ。

人より確かに性欲は少ないような気もするけれど、皆無ではない。

たまに唐突に来る欲求を自身で解消させる方法ぐらいいは知っているし一人で自身を慰めたこともあるけれど、ここまで、しかも指先で触れただけで頭の奥がちかちかしてしまうような感覚は知らない。

これ以上進んだら戻れなくなってしまうような気

がして、ぎゅうと目を閉じて勝手に収まるのを祈るように待つのだった。

「……………」

部屋のドアを背に、部長が困惑したような顔をしていることも知らずに。



先日的一件以降、桜花が連れて行ってくれた病院はとてもいいところで、薬を飲むようになってから随分と発情期の症状は楽になった。

一番嬉しいのは周期的になったことで、確実ではないが何となく予想できるようになり、急な休みで会社に迷惑をかけることを減らすことができたのは素直にありがたい。

葉を飲むだけでこんなに軽くなるなら、もつと早く決断しておけばよかった。

「あたしも発情期はキツイ方なんだよー」

「そうなんだ、桜花も……」

かたかたとキーボードを叩く音がオフィスに響く。営業の人は全員出払っていて、桜花とたった二人だけの空間はどこか心地良い。

「うん。まこと程じゃないけど、頭痛がするんだよね。出勤できないはないんだけど体もダルいし集中できないって感じ。せつかく権利としてお休みがあるから遠慮なく使わせてもらってるけどね」

「そっか。でもそう考えると、うちの会社ってすごくホワイトだよ。まだ発情期が理由の休み許可するの渋るところも多いのに」

「確かにねー。でもあたしはそんな会社だったらすぐ辞めてたよ。しょうがないもん、体調悪いと仕事

のパフォーマンスも落ちるしミスもしやすくなっちゃうし。それでも出勤させるような会社なんてきつと放っておいてもそのうち潰れるわよ」

確かに、社会的にも異種婚が認められつつある昨今、その辺の体制がすっかりしていない会社はそもそも従業員が集まらないだろう。

だからこそ会社の規定上は休暇があることを記載しておいて実際には上司に休暇の申請を跳ね除けられたりする、体調が悪いのに出勤させられる、休暇を取ったら社内で虐げられる、というような社会問題が浮上してくる。

嫌な世の中だ。

そういったニュースを目にするたびに、この世に生きるすべての人が他人に優しくできればいいのに、なんて思うけれどそう上手くは行かないこともわかっていく。

三、四重くらいに分厚いオブラートに包んで言うならば、この世界には色んな人がいる、ということだ。

様々な事情がある、とか細かいことは置いといて。

「と、こ、ろ、で！」

「？」

ぴこん、と向かいにあるパソコンから保存が完了したことを告げる効果音が鳴ったと思ったら、ずいと桜花が身を乗り出した。

「この間は具合悪そうだったから聞けなかったけど、部長の家に泊めてもらったんでしょ？ どうだった？ 一夜の過ちとかあった？」

「な、そ、そんなのあるわけないだろ！」

「えー？ だって迎えに行ったとき、まこと、すごく名残惜しそうな顔してたから、もしかしたらって思ったんだけど。違った？」

「そんな顔してないよ！」

「恥ずかしがらなくていいからさー。ね、ね、桜花お姉ちゃんに言ってごらんよ」

「だ、だから何もなかったって！」

「本当に？」

「本当に！」

じい、と桜花に真つすぐ見つめられてたじろぐ。

自分が勝手に一人で初めての感覚に困惑していただけなので、部長とは何もなかったという言い方は間違っていないはず。

それにいくら友人とはいえ女性である桜花にあんなことを相談するのは気が引けた。

「うーん、そっか。まこと、体調悪くなるタイプだもんね。そりやなんもないか……」

少し残念そうな桜花。

申し訳ないが、ないものはない。

その時、ぱたぱたと足音がしたと思ったら、オフイスの入り口がゆつくりと音を立てて開いた。

「ただいまー。いやあ、気温上がってきたな。もうジャケット着るの嫌になるよ」

思わず肩が震え、固まる。

その様子に気付かれたのか、正面で桜花がにやにやしているのが分かった。

外回りから帰ってきたらしい部長は手に持っていたジャケットを自分の席に放り投げ、片手に持っていた袋の中からアイスバーを取り出すと、更にその袋をこちら側に差し出す。

中には鮮やかなパッケージがいくつか見えた。

「二人とも、はい！ お土産だぞー」

「わー！ ありがとうございます部長！」

桜花が差し出された袋を覗き込んで、目を輝かせる。

「ちょ、え、ハーゲンダッツ入ってる！ いいんで

すか?! ねえねえまこと、どれにする?! あたしストロベリーがいい!」

ぴょんぴょこと飛び跳ねる桜花に、部長は困ったように頬を掻いた。

結露がアイスバーのパッケージを伝って落ち、彼の毛がしつとりと水気を含む。

「若い子の好みはわからなくてなあ。とりあえずバナナといちごとキャラメルとちよこちつぶ? を買ってきたから、好きなものを選んで食べなさい。他の人には内緒だぞ」

「よ、四つも……? いいんですか? 他の人には……」

盛り上がっている桜花を横目に部長を見上げると、彼はふいと視線をずらして黙り込んだ。

席を立てて選びやすいように隣に来てくれた桜花と顔を見合わせる。

一瞬口を開いて、しかしまた口ごもる……それを繰り返す部長に、今回のこのお土産には何かしらの意図があることを感じ取った。

それは桜花も同じだったのか、彼女は袋からストロベリー味のハーゲンダッツとプラスチックスプーンを取り出し、そそくさと蓋を開けてアイスを一口含み、にやりと笑う。

もう撤回はできないぞ、と言わんばかりの蠱惑的な顔に少しだけ背筋が凍った。

「部長。もしかして、あたし達に何か相談でもあるんじゃないんですか？」

「あ、えっと……うんと、だな。実は、相談というか、お願いがあるんだが」

もともと口ごもる部長を急かすように、桜花はもう一度、今度は多めにアイスを掬って口に運ぶ。

「……プレゼントを、一緒に選んでほしいんだ」

桜花に差し出されたストロベリー味のアイスが乗ったスプーンに齧り付きながら、初めて見る部長の表情にちよっただけ困惑するのだった。

ハーゲンダッツ二個のお礼というには少し部長側の負担が大きすぎるような気がする。

というのも、ハーゲンダッツを引つ提げて帰ってきた部長の「お願い」というのは、こう。

「若い子に誕生日プレゼントを贈りたいんだが、何を送ったらいいかわからなくて」

先日、オフィスでその一言だけを聞いた自分は桜花と一緒に固まった。

桜花の手から零れ落ちたスプーンが空中で数回転してカーペットの上に落ちていく。

「えっと……………お、お子さん……………にですか……………」

恐る恐る零した桜花の言葉に彼はぽかんとしたあ

と、豪快に口を開けて笑う。

「あっはっは！ 違う違う、姪っ子だよ。子供なんていないさ。期待を裏切るように悪いけどね」

「な、なんだー！ びっくりしちゃいましたー！」

なんて、そんな話をしたのが先週のこと。

そして今日はついにその約束の日。

待ち合わせ時間の三十分前に着いてしまい、とりあえず天気も良かったのでその辺のカフェで飲み物をテイクアウトして待ち合わせ場所近くのベンチに腰を下ろす。

なんとなく気付いてはいたが例の如く桜花からは「私今日用事できちゃったから行けない！ ファイト！」という旨のメッセージが届いた。

しかも部長には二日前に連絡済みという用意周到ぶり。

桜花め。

「一之瀬くん。また待たせてしまったね。すまない」

最後の一口を飲み切ったその瞬間、焦ったように部長が視界に飛び込んできた。

この光景、前も見た気がする。

ただ前回と違う点で言えば、私服ということ。

白いシャツに、下は少しだけルーズなチノパンツ。いつもは一番上までぴっちりとは閉められているボタンは煩わしように少しだけ着崩されている。

シンプルな着こなしだがお洒落に見えるのは彼が長身なうえ、それなりに鍛えられてがっちりとした体つきだからだろう。

心なしか周囲の人々の視線が熱いような。

「一之瀬くん？　どうかしたかい？」

「あつ、いえ……その、部長の私服姿、新鮮だなと思って」

「そうかい？　あまりいつもと変わらないと思っ

いたんだけど」

確かにテイスト的には普段のスーツと一緒にだけれど、少しラフなところが妙に色っぽくて猶のこと。休日と一緒に出かけている感が強調されて緊張してしまう。

「それじゃあ、早速行こうか」

「は、はいっ」

周囲の視線が外れていくのが分かる。

すれ違った女性がぼそりと「なんだ、フリーじゃないのか」と呟くのが聞こえた。

途端、顔に熱が集中する。

もし恋人同士だったのならここで手を取って……なんて。

「一之瀬くん？」

ずい、と。

目の前に部長のふわふわの顔が飛び込んできて、肩が跳ねた。

「大丈夫かい？　もしかしてどこか具合でも」

「だ、大丈夫ですっ！　それより早く行きましょう！　！」



プレゼントというのは難しい。

それも学生という多感な年ごろの、加えて女の子へのプレゼントとなると最難関だ。

いつも会っているような仲のいい女性へのプレゼントであれば趣味も趣向もわかつているので選びやすいけれど、普段あまり交流しない女性に対してのプレゼントほど難しいものはない。

折角プレゼントするなら使ってもらいたいし、相手に要らないとは思われたくないだろう。

あれこれとアドバイスをしたり二人で悩んでいると部長が感心したように小さく息を吐いた。

「一之瀬くん、随分詳しいね。お姉さんか妹さんでもいるのかい？」

「一人っ子です。桜花が、えっと、東さんがそういうの詳しいので」

「はは。いつもの呼び方でいいよ。君たちは本当に仲がいいね。微笑ましい限りだ」

基本的に友達と呼べる相手が桜花以外殆どいない自分。

休みの日はもっぱら彼女と出かけることが多く、その殆どが彼女の買い物に只管ついて回るというプランばかりだ。

そのたびに彼女は自分の洋服へのこだわりや気を付けていることや、好きなテイストなんかを楽しそ

うに話してくれて、自分がそれを実行するかどうかは別としてファッションなんかには妙に詳しくなつてしまった。

ただ、彼女のこだわりを聞くたびに、毎年の誕生日プレゼントを悩ましてしまうのだけが唯一ちよつとだけ辛い点だ。

しかも彼女がくれる誕生日プレゼントはそりやまあ毎回自分の好みドンビシヤなんだからまた悩む。何をあげても喜んでくれるからこそ、猶更。

「あ、部長。あのお店はどうですか？」

視界の端に映ったのは小ぢんまりとした雑貨屋。木で出来た小さな看板が時折風に揺られてからからと音を立てていた。

外装は「隠れ家」といった感じだ。

シックな色味の木造の店の前には少しだけ日焼けしたベンチと黒猫の置物とがぼつんと置いてある。場違い感を感じながら恐る恐る店に足を踏み入れ

ると、随分年季の入った棚の上に小物やアクセサリ、置物などがずらりと並べられていた。

照明が少なく、かつ建物に使われている木材がダークオークのような色をしているからか店内は少しだけ暗い。

ドアに取り付けられたステンドグラスだけが外から落ちてくる太陽の光を浴びて七色に煌めいてた。まるで異世界に迷い込んだみたいだ。

少しだけわくわくしたものを感じながら、歩くたびに床が軋む音を楽しみつつ店内をぐるりと回る。

店の奥のカウンターには優しそうな獣人のご婦人が座っていた。

垂れ耳がぴくりと動いたと思うと目を細めて、ぺこ、と小さく頭を下げる彼女。

釣られて自分も会釈をする。

「どうぞごゆっくり」

入店してから、早一時間ほど。

色々と悩んだ末に、部長が決めたと言いつつ手に取ったのは首にシックなネイビーのリボンを巻いた
デディベア。

サイズは三十センチくらいで、部屋にちょこんとおいてあったら可愛いなと思えるくらいのサイズ感だ。

しかも随分しっかりしていて、座らせたらちゃんと自立する。

「ど、どうかな」

「いいと思いますよ。部屋に置く雑貨としてもいいですし、ぬいぐるみが好きな女性は多いらしいですから」

「そうか！　じゃあこれにしよう。ただぬいぐるみ一個じゃ味気ないからもう一つなにか欲しいところだな」

「じゃあこれなんてどうですか？」

ふと目に着いたのは、デディベアが首に巻いてい

るのと同じ色のリボンがついたバレツタ。

ちょっと大人っぽすぎるかとも思ったけれど、ここに来るまで姪っ子さんの話を聞いていると長い髪を大切にしているみたいだしきつと大人になってからも使えるだろう。

そつとバレツタを持ち上げると、ふわりとリボンが揺れて手首の上に着ちる。

その触り心地はさらさらとしていて、表面は店内の暖色を浴びて光沢を放っていた。

「おお、いいじゃないか！　姪っ子が好きそうな色だ。じゃあこの二つにするよ。会計をしてくるから待っていてくれ」

「わかりました。じゃあ僕、外で待ってますね」

あまり広くはないお店の中を既に何周もしてしまつた。

一人で切り盛りしているお店にこれ以上長居するものなんだか気が引けてしまったものあって、そ

そくさと店を出る。

ずっと薄暗い店内にいたからか少しだけ西側に
ある太陽の光がいつもより明るく感じた。

このまま突っ立ってるのもなんなので、お店の前
にあるベンチにそっと腰かけると、ぎし、と随分頼
りなく揺れる。

全体重をかけるのは少し怖くて浅く座った。

「ん、わ、すごい。これ灰皿なんだ」

ベンチ脇にいた黒猫の置物。

先ほど正面から見たときは気が付かなかったが、
頭の後ろには穴が開いていてその中に揺らぐ水面に
数本タバコの吸い殻が浮かんでいる。

黒いから汚れが目立たないというのもあるかもしれ
ないが毎日丁寧に手入れをして水も替えているん
だろう、真つ黒い置物の表面に自分の顔が反射して
いた。

「待たせたね」

思わず夢中になって覗き込んでいると、店のドア
が開いて部長が顔を出す。

手には紙のショッパを持っていて、ちよつとだ
け箱の角が覗いていた。

「この商品、おばあさんの手作りなんだそう
だよ」

「そうなんですか?! 全部?!」

「ああ。このぬいぐるみも髪飾りも彼女の手作りな
んだそうだ」

「すごいですね……じゃあティディベアの首に巻いて
るリボンとバレッタのリボンは似てるんじゃないかと
きつと同じ素材を使ってるんじゃないかね」

ティディベアとお揃いのアクセサリーなんて、きつ
と喜んでもらえるはずだ。

今度桜花と一緒に来よう。

あ、でもそうしたらまた誕生日プレゼントに悩むだろうから、桜花を連れてくるのは彼女の誕生日が終わってからだな。

そう思いつつベンチから立ち上がる。

「いやあ一之瀬くんがいてくれて本当に良かったよ。私一人では悩み過ぎて決まらずに終わるか失敗してしまうところだった」

「いえ、そんな」

「やっぱり若い子のことは若い子に聞くのが早いなあ。おっさんには難しいよ。ところで、今日のお礼にお昼をご馳走したいんだけど食べたいものとかはあるかい？」

「え？　だ、大丈夫です！　お昼は自分で出しますよ！」

「いいやダメだ。私の気が収まらないからな。こんな時間まで休憩も取らず付き合わせてしまったんだから少しはお礼をさせてくれよ」

「でも……」

「いいから！　ほら、行くよ」

ぎゅ、と。

部長のふわふわの手が手首に巻き付く。

自分よりも高い体温が触れている部分から流れ込んできて、その体温は一気に顔まで上がってきた。

手を繋いでいるというよりは手を掴まれているだけだったけれど、それだけでも恋という感情をひたひたになるまで吸い込んだ心臓は今にも弾け飛んでしまいそうになる。

ずんずんと前を歩く彼の背中は自分の数倍は広くて、遅しい。

もし、今手首を握っているその手に指を絡めて、前に行く背に頬を寄せることができたなら……。

まあそんなことができる人間だったら、想い人とこんな微妙な距離感でじたばたしていないだろう。

もう一歩大きく踏み出す勇氣は、まだ僕の中には芽生えていないから。

「今日は本当にありがとう。こんな時間まで付き合
わせてすまなかったね」

もう陽はすっかり落ちて、西日が眩しい時間帯。
そもそも昼食を食べ始めるのが遅かったのもあつ
て、ゆっくり食べていたらすっかりこんな時間にな
ってしまっていた。

少し遠くで線路がガタつく音が聞こえる。

「いえ、そんな……僕も、楽しかったです」

部長と自分との最寄り駅は逆の路線だ。

目の前にある改札を通ってしまったらもう今日は
帰るしなくなってしまう。

帰りたくない、なんて可愛い我儘は流石に言えな
い。

それでも少しだけ足掻いてみたくて、振り向こう
と足を止めた瞬間だった。

「い、一之瀬くんっ」

手首を掴まれて視界がぐらつく。

突然のことに驚いてしまい、崩したバランスを立
て直そうと思う間もなく背中に柔らかな感触が飛び
込んできた。

部長に支えられていると気付いたのはそれから数
秒後。

「えっと……部長？」

ふいと見上げると焦ったような表情を浮かべる彼
と目が合った。

彼の目は何度か泳いだ後、決心したように戻って
きてこちらを真っすぐに見つめる。

「突然手を引いてしまつてすまない。その、これを、
渡したくて」

慌てて姿勢を正して向き合うと、部長は持つていたショッパーから小さな紙袋を取り出してこちらにそっと差し出した。

可愛らしいシールが貼られたそれを受け取ると、手のひらに収まるようなサイズにしてはずっしりとした重みを感じる。

「今回のお礼にとあの雑貨屋で買ったんだが……なんだか渡すのが憚られてしまってたね。でも、やっぱり君のために買ったものだから」

そういう彼の顔は酷く不安そうで、垂れ下がった耳と尻尾とが力なく揺れていた。

その様子が普段の部長としての彼とは似ても似つかないほど頼りなくて、そのギャップに心臓が跳ねる。

「今開けても？」

「……あ、……ああ」

折角のシールを破かないように慎重に紙袋を開けると、紙袋の底にあったのは重量感がある黒猫を模した置物。

「君のデスク、やたら猫のグッズが多いだろう？猫、好きなのかと思って。……もしかして違ったかな？」

「い、いいえ！ 違わない！ 違わないです！」

勢いそのまま否定して、ひんやりとしたその置物をぎゅうと握り締める。

「ありがとうございます。デスクに飾りますね」

「え……えっと、それはちよっと恥ずかしいのだから……」

気恥ずかしそうに頬を掻く彼。

今日はいつもよりどこか弱々しい彼に余裕が出た

のか、自然と笑みが零れた。

彼の顔が赤くなっているように見えたのもきつと、そのせい。

「えー、嫌です。絶対飾ります」

「こ、困ったなあ。……一之瀬くん、今日は本当にありがとう。休日にすまなかったね」

そういつてポケットから定期券を取り出す彼。

ああ、今日はもうお開きなんだな、なんてぼんやりと思う。

「また誘ってください」

「え？」

「今回みたいに……いえ、用事なんてなくても、また誘ってくださいね」

臆せずそれを言えたのは、泣きそうなほど綺麗で眩しい夕日のせいで彼の顔が、あまり見えなかったから。

だから。

「あれっ、部長」

後ろで自動ドアがゆっくり閉まる。

休日のお昼過ぎ。

おなかも減ったしこれからランチにでも行こうかな、なんて考えながら今貰ったばかりの薬と処方箋とをリュックにしまい込んだらちょうどその時、目の前を通りかかったのであろう部長と目が合った。

「おお。一之瀬くんじゃないか」

声をかけたことに気付いてくれた彼は、わざわざ駆け寄ってきてくれる。

が、その途中で彼は錆びついてしまったかのように立ち止まった。

その様子は不思議だったけれど、足りなかった分

の数歩はこちらから歩み寄る。

ふわりと彼のシャツからはタバコの匂いが漂っていた。

それに、コーヒーの匂いも。

「お散歩ですか？」

あ、眼鏡かけてる。

あまり見ることのできないその姿に少しだけ嬉しくなった自分に対し、固まったままの部長の顔はさあつと青ざめていった。

その様子の理由がわからず、首を傾げる。

「い、一之瀬くん……」

「？ はい」

彼は震える手で今自分が出てきた建物を指して何度もちらの顔と建物とを交互に見た。

その視線に釣られて少しだけ振り向くと、産婦人

科」という文字が飛び込んでくる。

先日、桜花に紹介してもらった病院だ。

あれからずっとこの病院にはお世話になっている……のだけれど、どうやら部長の顔はそうだとは思っていないように口をばくばくと開閉させている。

「にっ、ににに、妊娠?」

あまりに切羽詰まったその様子に、思わず噴き出してしまった。

「っあはは。違いますよ。僕、男ですし」

「あ……えっと、じゃあ、もしかして彼女か奥さんの付き添い、とかかな?」

恐る恐るといった様子で尋ねる彼の目があちこちへ泳ぐ。

心なしか笑顔が引きつっているような。

気のせいだろうか。

「薬を貰いに来たんです。発情期抑制のための」

「……え? あ、ああ、そうか。そういえば病院に行くよう促したのは私だったな……。あれから幾分よくなったかい?」

「はい。嘔吐や頭痛は大幅収まりました」

「それは良かった」

あの日、道端で発情期が来て部長に助けられて以降、桜花に紹介された病院で薬を貰って飲み続けるようになってから発情期中の辛い症状は暫く鳴りを潜めている。

本当にありがたい限りだ。

ただ一つ、以前まではなかった症状が出てきていることを除いて。



どくん、と心臓が跳ねる。

と同時に背中をぞくぞくとした寒気が上ってきた。

「っは、あ……ふ、」

ぐらつく視界、回らない頭。

そして、力の入らない腰。

そう、以前まではなかった症状というのはこれだ。
発情期による頭痛や吐き気など体調不良を伴う症状が減ったのは良かったのだけれど、その反動とて
もうのように発情期中は異常なほどに性欲が増すよう
うになってしまった。

性欲が増す、というよりは異常に敏感になってしま
う、と言った方が正しいだろうか。

風が頬を撫てるのすら、服が肌に擦れるのすら、
もどかしくなる。

「くすり、どこ、やったっけ……」

部長と軽く立ち話をして別れた数分後、突然自分の
身体が言うことを聞かなくなった。

顔に熱が集中して、汗が噴き出る。

とりあえず往来で座り込むわけにもいかないので
殆ど引きずるようにしながら薄暗い路地に転がり込
んだ。

今更汚いとか言っていられない、地面に落ちてる
タバコの吸い殻やらゴミやらはできるだけ避けつつ
壁を伝って座り込み、鞆を開く。

葉を入れてあるポーチが入っているはずなのだけ
れど、一体どこに入れたのやら見つからない。

「やば、っう、」

早く、早くしないと。

葉が見つからなかったら最終手段がないわけでは
無いけれど……こんなところでは、嫌だ。

そう思う反面焦れば焦るほど症状は悪化していく。

焦りばかりが先行してどうしようもない。

一旦落ち着こう。

そう思い、深呼吸をしたときだった。

「美味そうな匂いがすると思ったら、混血がいるじやねえか」

下品な声色が降ってきて、視線を持ち上げる。

目の前に立っていたのは獣人。

ダメージジーンズのポケットに手を突っ込み、ニタニタと笑みを浮かべながらこちらを見下ろしていた。

口の端からだらしなく舌が伸びていて、尾は小刻みに震えている。

「ふうん、発情中か。ちょうどムラッと来てたところだし、そのままじゃ辛いだろう？ 相手してやるよ」

「つな、や、やめっ」

「暴れんなって。今業にしてやるからよ」

暴れるなどとは言われたものの、今の自分の力では目の前にいる獣人の腕を振りほどくなんて土台無理な話だ。

そもそも獣人は人間に比べて力が強いんだから端から勝負にならない。

両手首を一纏めに拘束されると同時に柔らかい肉球が腿を撫で上げ、思わず肩が跳ねた。

「や、やだあつ」

力が入らない。

怖い。

苦しい。

「助けて、誰か……っ」

嫌なのに、ここで意識を手放したらすべてが終わってしまふと分かっているのに、気持ちとは裏腹に

視界はどんどん霞んでいく。

知らない男の手は本当に気持ち悪くて、嫌で嫌で仕方ないのに。

微睡の中に沈んでいく途中、大好きな彼の声が聞こえた。



「おい、おい！ 一之瀬くん！」

肩を揺さぶられ、無意識に求めていた声が鼓膜を揺らして、ゆっくりとだけれど手放しかけた意識が戻ってくる。

目の前にはあの男じゃなくて、部長がいた。少しだけシャツの襟に皺が付いている。

「安心しろ、あの男は逃げた。もう大丈夫だ」

「っは、ぶちよ……？ ど、して」

「君の顔色があまり良くなかったから……心配で追いかけてきたんだ。それより、大丈夫か？ 顔が赤い。病院に……」

追いかけてきてくれたんだ。

自分ですら気づかないぐらいの変化に気が付いてくれる。

嬉しい……。

「っ?! あ、うう……!」

「ど、どうした！ 大丈夫か?!」

腰が浮く。

部長の声、匂い、視線。

すべてにクラクラする。

だめだ、このまま部長と話していたら、おかしくなってしまう。

「ひー、と、が……かばん、に、くすり……」

「葉だな?! わかった、もう少し頑張るんだぞ」

部長が自分のバッグを開けて漁っているのが視界の端で見えた。

空いた片手は自分の身体を支えてくれている。

氣遣いは嬉しいけれど、体を支えてくれている部長の手の平が揺れるたびに心臓が激しく脈打つので、正直その辺に放っておいてくれる方が楽だったりする……。

数秒の後、バッグの底の探検から戻ってきた彼の遅い手には見慣れたポーチが。

「これか?!」

ポーチのチャックを開けて中を覗き込んだ彼の耳がぴくりと動く。

ちよっとだけ意識がはつきりしてきた。

案外、自分より焦ってる誰かを見ると冷静になる

というのは嘘じゃないらしい。

「葉いっぱいあるぞ?! どれだ?!」

妙に勢いのあるその問いかけと、焦ったような顔がなんだか面白くて、思わず肩が揺れた。

「っ……ふふ、ふはっ……」

「? 一之瀬くん?」

「すみ、ませ……ぶちよ、そんなに、焦らなくても……」

吹き出したこちらを見て、少しだけ落ち着いたらしい彼は困ったように笑う。

「なんだ、意外と元氣なんじゃないか。よかった」

「……すみませ、ん……、ふふ、葉、ピンク色のやつ、です」

「ピンク? これか。水は……あるな。ほら、口開

けて」

「だっ、だいじょうぶ、です。流石に自分で飲めま
すっ」

部長から渡された葉を口に放り込んで水で流し込
むと、どんちゃん騒ぎをしていた心臓は少しずつ落
ち着きを取り戻し始めた。

まだちょっとぐらぐらするけど、歩けなくはない。
けど、今日はもう帰って家で大人しくしていよう
……。

「部長、ありがとうございました。もう大丈夫なの
で」

壁を使ってゆっくと立ち上がる。

部長が手に持ったままの自分の鞆を受け取ろうと
したが、部長はその手をひよいと遠くへ。

「そんなふらふらな状態で一人で帰るつもりか？」

「えっ、葉も飲んだし……もう大丈夫ですよ」

そんなに心配そうな顔をしないでください。

そう主張するが、彼は鞆を返してくれそうにない。

「家まで送ろう」

「えっ、そんな悪いです！ 部長のおうち、僕の家
と反対側じゃないですか」

「一之瀬くん」

いつもより真剣な、少しだけ低い声色に思わず固
まった。

路地にいるからか暗い影が落ちたその表情は少し
だけ乱暴で、ぎらりと光る瞳孔に背筋が栗立つ。

「あまり、心配させないでくれ」

頷く以外の選択肢を奪われ、家に帰りつくまでに
どうにかなくなってしまふんじゃないかと心配になりな

がら、彼の後に続いて路地を出るのだった。



夜、ベッドで横になっていると、腹部が空腹を訴え出した。

そういえば今日はまともに食事を取っていないあ、なんて思いつつ冷蔵庫を開けるが、空しいほどに空っぽ。

かといって、今は徒歩五分先にあるコンビニに行くのすら億劫で……。

不便な体だなあ、なんて思いながら夕食は諦めようとベッドにすくこと戻った次の瞬間、枕の上に放り出してあったスマホがぶるぶると震えだした。

ふと時計を見上げると二十二時。

こんな時間に誰だろうとスマホを手にとると、画面に表示されていたのは着信の文字。

相手は……。

「部長?!

心臓が跳ねる。

こんな時間にどうしたんだろう。

「もしもし……」

「朝桐です。一之瀬くん? 体調は大丈夫かい?」

「あ、はいっ。大丈夫です」

「そうか、良かった。今は家から出られないだろう?

辛いだろうから飲み物とか色々買ったんだが、

今から届けに行ってもいいか?」

「えっ?!」

「迷惑かと思ったんだが、お昼も食べていない様子だったしどうしても心配だね。もしかして、お節介だったかな」

段々と自信を無くしていく声。

電話の向こうでしょぼんとしている彼の顔が浮かぶ。

ランチに入ったお店が禁煙だった時も同じ顔をするから、容易に想像できた。

「そんなことないです!」

……と、いうわけで。

「冷蔵庫に勝手に入れてもいいかい?」

「大丈夫です。ありがとうございます」

彼から電話があった数十分後。

我が家に彼がいる。

こんなことなら昨日のうちに掃除をしておくべきだった。

ああ……テレビの後ろ、埃溜まってる……。

連絡を受けてから部長が来るまでの時間ではぐちやぐちやだったベッドをどうにかすることしかでき

ず、どうにか彼が家の汚れに気が付きませんようにと祈ることしか出来ない。

こうした急な来客のために、今後は日頃から掃除をしておこうと固く誓った。

「好みあまり分らなかったから、お弁当は何種類か買ってきたよ。どちらにせよ明日は仕事に来られないだろう?」

「氣を使わせてしまってすみません……」

「いや、私が勝手にやったことだ。そう何度も謝らないでくれ」

部長はお弁当や飲み物だけでなく、ゼリーやプリンなど食欲がなくても食べられそうなものまで買ってきてくれていた。

手際よく冷蔵庫に食べ物を詰めていく彼の背中を壁に寄りかかってじいと思つめる。

殺風景だった冷蔵庫が美味しそうな食べ物で溢れかえっていく様を眺めていると、不思議と気持ちま

で豊かになっていくような気がした。

「よし。じゃあ、そろそろお暇するよ。私がいては食べずらいだろうし」

食材でぎちぎちになった冷蔵庫を閉めた彼は、お弁当とお茶とが一つずつ残った袋を持って立ち上がる。

そうして玄関へと向かっていく彼の大きな手を……取る勇氣はなかったので、服の裾を掴んだ。

驚きで動きを止めて振り向いた彼の顔はぎよっとしている。

「……あ、えっと」

それ以降を何も考えていなかった。

というか、まずこんなことをしようだなんて頭では思っていないくて、自分で自分に驚いている。

部長は驚きながらも次の言葉を持ってきていた。

何か、何か言わなくては。

「……あ、あのつ、ここで、食べていきませんか？」

「え？」

「えーっと、その……そう！ お、お弁当っ、せつかくのお弁当、冷めちゃいますし」

スーパーで買ってきてくれたものなので冷めるものもないと気が付いたのは言った後だった。

だが、しどろもどろの自分の様子に、彼は困惑しながらもそつと部屋に置いてあったローテーブルの前に腰を下ろす。

「じゃあ、お言葉に甘えようかな」

「は、はいっ」

無音というのも気まずいので、テレビを点けた。すると画面からは賑やかな笑い声が零れ落ちてく

る。

「どうやらお笑い番組がやっているようで、右上で『三時間スペシャル』というロゴが楽し気に回っていた。」

「部長。お弁当、温めますか？」

「ああ、自分でやるよ。レンジ借りるね。一之瀬くんは？」

「僕はこのままで大丈夫です」

「そういえば最近、あんまりテレビも観なくなっとなあ。」

「観たいドラマや番組があったときはオンデマンドで済むし、わざわざ番組表を確認することもなくなった。」

「昔は新聞一面にびっしりと書き連ねられた番組表を食い入るように見つめていたというのに。」

「あっ」

画面端から登場してきたお笑い芸人を見て思わず声を上げてしまった。

お弁当を温めて戻ってきた部長が首を傾げる。

「この芸人さん好きだったんです。本当に面白くて、ネタも角度が斬新で」

「へえ。一之瀬くん、お笑い好きなのかい？」

「はい！ 最近はいあんまり観なくなっちゃってましたけど……」

「久々の特番ということもあってつい夢中になって観てしまった。」

「部長もお笑いは嫌いではなかったらしく、二人で一緒になって笑ったり感想を言いあったりしているうちに番組は終盤に差し掛かった。」

「司会の男性が番組を纏めにかかり、下には長々とスタッフロールが流れ始めたところではっとして時計を見上げる。」

時計はもう零時を過ぎていた。

釣られてか同じように時計を見上げた彼は、おや、と声を上げる。

「もうこんな時間か。すまないね、長居してしまつて」

「いえ、それは全然大丈夫です。でも部長、もう終電ないですよね……?」

「そうだね。タクシーを捕まえることにするよ」

身支度を始める彼。

まあ身支度と言っても休日だったので上着を着るくらいなものだったけれど。

なので、きつとあと数十秒もすれば彼はいなくなってしまう。

ほんの数秒前まで一緒に過ごしていた時間がもう既に恋しくて、これから一人、ぽつんと残されるのがたまらなく寂しい。

「……泊まっていてください」

羽織りを手に取った彼の動きが止まる。

思えば、今日は彼の動きを止めてばかりだ。

自分はこんなに積極的な性格だったかな。

発情期のせいで冷静になれていないのかもしれない。

「時間も遅いし、危ないですよ。それとももしかして、恋人が待つてたり?」

「恋人はいないと前に言っただろう? それは今もだよ。でも本当にいいのかい? 体調は?」

「大丈夫です。……それよりも」

「……? それよりも?」

まだ迷っているのだろう。

手に取った羽織りを置こうとしない彼を、じいっと見上げた。

「一人は、心細くて」

ごくり、と。

生唾を呑む音が聞こえたのは、果たして気のせいだったのだろうか。



家の風呂はあまり広くはないので、彼には徒歩数分の場所にある銭湯に行って貰った。

流石に自分は発情期の余韻が残る状態で銭湯へは行けないので家の風呂に。

いつも使っているシャンプーやボディソープのトラベルセットを部長に持たせたけれど、足りるだろうか。

人間と違って獣人はシャンプーなどの消費が凄いと聞いたことがある。

まあ、全身を毛で覆われているのだから当たり前だろうけれど。

「……っはあ、」

湯船に浸かって一息吐く。

来客用の布団、念のため洗ったばかりのカバーに変えよう。

それからテーブルをどこかに退けないと布団は敷けないな……歯ブラシはストックがあるけど人間用で大丈夫かな。

ぐるぐると必要なものを考えているうちに、今までなんとなくぼんやりとしていた認識が徐々に確固なものになっていく。

本当に、部長が泊まっていくことになってしまった。

発情期中に、想い人と、同じ部屋で、一晚待つて。

もしかして自分、今とんでもない状況にいるので

は？

しかも部長が来るまでは体がだるいからシャワーは明日の朝に浴びるつもりだったのに、今は何故かしっかりお風呂に入っているし。

「~~~~っ！」

急に自分がとんでもなく破廉恥な人間のように思えてしまって、思わず湯船に顔を沈める。

顔が熱い。

「ど、どうしよう……今日、眠れるかな……」

風呂場の中で反響したその声は嫌というほど震えていて、緊張しているのが分かった。

何もないはずだ。

彼に限って、きっと。

まあ別に彼なら何かあってもいいかなとは思っけれど……いや、やっぱりだめだ。

心の準備が出来ていない。

「……あがろ」

ドライヤーを持つ手も震える。

妙にそわそわしてしまって満足に乾かさないうままリビングに戻ってローテーブルを退かせて、来客用の布団を敷いた。

が、なんだか布団が小さい気がしてもう一つ布団を取り出してその隣にびったりとくつつける。

部長、体格良いからなあ。

このくらしいの幅があれば大丈夫だろう。

それにしても、やっぱりワンルームは狭い。

元々置いてあるシングルサイズのベッドと、その隣に布団を二つ敷いたらもう足の踏み場は殆どなくなってしまった。

バストイレ別で洗面所も独立してるのは嬉しいけど。

そんなとき、背後で鍵の開く音がした。

振り向くと首にタオルを巻いた部長が部屋の入り口で突っ立っている。

「? どうしたんですか、部長」

お風呂上がりだからか少しだけ上気した頬のままぼかんとしている彼の様子が不思議で首を傾げた。

「……………その、布団は」

「ああ。これですか? 部長、体大きいから一つじや狭いかなと思って」

「あつ、ああ、そ、そうか! そうだよな! 気を使わせてしまつて、すまないね。ありがとう」

「? いえ……」

そういつて、布団に向き直る。

何か変なところあったかな。

目の前にはベッドなんて他所にびつたりと寄り添う布団と、二つの枕。

掛布団は、一枚。

「……………!」

思わずもう一度振り向く。

部長は数歩進んではいるものの、ぼつの悪そうな顔をしたまま相変わらず突っ立っていた。

沈黙が流れる。

頬に張り付く少しだけ湿った髪が、顔の熱で乾いてしまいそうだ。

「えっと……歯ブラシ、洗面所に出しておいたので

……」

「あ、ありがとう……」



残念なことに……いやいや、予想通り、特に何も
なく翌日の朝はさつさとやってきた。

カーテンの隙間から差し込む朝日が眩しくて目を
擦る。

体を起こすとキッチンには部長が立っていた。

とくに着替えと身支度を済ませて優雅にコーヒ
ーを飲んでいる。

仕事モードの彼が自分の家にいるのは新鮮で、謎
の背徳感があった。

「おや、おはよう」

「……おはようございます」

「寝巻ありがとうね。今度洗って返すよ」

「そんな。置いていって大丈夫ですよ」

「いやいや。若い子におじさんが着た寝巻を洗わせ
るなんてことさせられないよ」

母親から間違って送られてきた獣人サイズの大き
な寝巻がこんなところで役に立つとは思わなかった。

というか、本当に、同じ部屋で一晩過ごしちゃっ
た……。

まあ何もなかったただけれど。

「ケトル、借りたけれど大丈夫だったかい？」

こくりと頷くと、彼はぐしやりと不器用に笑った。
時計を見上げると短針は六を少し過ぎた辺りにあ
る。

まだもうちょつと寝られるな、と思っていると部
長は手際よく使っていたコップを洗うと水切りかご
に置いた。

彼が使っていた布団は丁寧に畳まれている。

「じゃあ私はそろそろ行くよ。今日はアポがあるか
らスーツに着替えないといけないし。昨日のことも
あるし、一之瀬くんは無理しないでゆっくり休むん
だよ」

そう言つて玄関へと向かう彼の背中を慌てて追いかけた。

靴を履き、ドアノブに手をかけた彼はそつと振り向く。

「お世話になったね。本当にありがとう」

「こちらこそ、食べ物とかありがとうございました。助かりました」

「いいんだよ、このくらい。また何かあったら連絡してくれ」

「……ありがとうございます」

「じゃあ、また職場で」

そういつて力なく微笑む彼の目元には隈があるようにも見えた。

「えっと、その、いつてらっしゃい」

「はは。いつてきます」

ゆっくりと閉まるドア。
遠ざかっていく足音。

それらを名残惜しく感じながら音を立てないよう静かに鍵を閉めた。

先ほどまで彼がいた部屋に振り返つて足を止める。昨日布団を敷いたときには狭いと思つたはずなのだけれど、一人になった途端に広く、そして少しだけ寒く感じた。

「あれ？　これって……」

体調もそんなに悪くないし折角なら部屋の掃除でもしようかと思つたその時、テーブルの上に色褪せた手帳を見つけた。

恐らく部長のものだろう。

表紙には十年も前の年が刻まれている。

「明日返そうっと」

忘れないように出勤用の鞆に入れておこうと手帳を手に取ったその時、手帳から一枚の紙が滑り落ちた。

仕事の大事なメモだったら困ると慌てて拾い上げる。

が、なんの思惑もなくその紙を裏返したことを後悔した。

それはメモなんかではなく、手帳と同じく少しだけ褪せた写真。

そこに映っていたのは、鮮やかなステンドグラスから降り注ぐ七色の光と、その光を浴びて輝くドレスに身を包みベールを被った綺麗な獣人女性。

そして、その隣で幸せそうにはにかむ部長だった。

「ちよつとちよつとまこと！」

翌日。

丸一日ぐっすり眠り、絶好調とまでは言えないけれどマシな体調で出勤した瞬間、桜花が慌てた様子でこちらのデスクまで駆け寄ってきた。

その目はきらきらと輝いていて、どうやら自分が出勤するのを待ってくれていたらしい。

彼女はそのまま顔をずいっと寄せてきたと思うと小声で、

「やるじゃん！」

そういい、肩を強く叩いた。

訳が分からないまままだ痛みに顔を顰めていると、彼女は嬉しそうに、本当に嬉しそうに続けた。

「もー、なんで報告してくれないのよ！ 部長と付き合うことになったって！」

……………んん？

「ち、ちよつと待って桜花。何の話？」

「なによ、今更隠すつもり？ この桜花ちゃんにかければバレバレなんだからね！ 全く、おんなじシヤンプーの匂いなんてさせちゃって見せつけてくれるじゃん、このこのー」

その言葉に思わず桜花の顔を見る。

目が合った彼女は可愛らしくにこりと笑みを浮かべた。

「恋、実って良かったね！」

「……………えっと」

とりあえず、今日のランチは個室にしようと思に決めるのだった。



「嘘でしょ、家に泊まったのに何にもなかったの?!」

ばん、と彼女はテーブルを両手で叩く。

テーブルに乗った大皿とその上に乗ったトンゴとが揺れてかちあう音が響いた。

「ちよ、桜花っ、声大きいよっ」

エビチリを口に含みながら目の前で興奮気味の桜花の肩を押し、座らせる。

やっぱり個室がある店にしてよかった。

それと、お昼の混み合う時間を避けたのも。

桜花の勘違いをそのままにしておくわけにはいかず、訂正するためにランチの時間を使って一昨日から昨日までにかけて起こったことを事細かに説明したのだけど……。

どうやら火に油を注ぐ行為になってしまったらしい。

「ちよっと落ち着いて……」

「これが落ち着いていられますか! いい年した大人が二人、同じ屋根の下で一晩過ごして何もないなんて信じられない!」

ヒートアップしていく桜花の口にとりあえずエビチリを突っ込む。

彼女はそれを噛み締めて一瞬だけ幸せそうな顔になり……あ、ダメだ、戻っちゃった。

「だ、だって別に恋人でも何でもないし……」

自分で言って落ち込む。

だけど、それが変えようのない事実で、曲げようのない現実だ。

一方の彼女は不満そうな顔のままランチセットについていたスープを飲み干し、少し音を立ててテーブルの上に戻したかと思うところをぴしりと指した。

「ねえ、まこと。考えてもみなよ。好きでもない相手にわざわざ弁当やら食べ物やら買って持っていく？ 絶対部長はまことのこと好きだった！」

以前までの自分なら、その言葉に少しでも勇気づけられていただろう。

浮足立っていただろう。

でも、今は違う。

鞆の中に入ればなしの、返せずにいる手帳に挟まっているあの写真。

あれが、自分には脈なんて最初からなかったということを物語っている。

押し黙ってしまったこちらに何かを察したのか、桜花の表情は不満そうな顔から心配そうな顔に変わっていった。

少し身を乗り出した彼女はテーブルの上に放り出されていたこちらの手を取って、強く握る。

「もしかして、何かあったの？」

力強い体温が手の甲から流れ込んできて、それに背を押されるようにしてそっと顔を上げると桜花とばつちりと目が合った。

彼女の透き通った真っ黒い瞳の向こうには今にも泣きだしてしまいそうな情けない男の顔が映っている。

「あの、ね……部長、部屋に手帳を忘れていったんだけど……手帳に、結婚式の写真が挟まってたん

だ」

「え？ それって」

「部長が女性と映ってた。多分だけど、奥さん」

桜花が固まったのが分かった。

「写真に日付は書いてなかったけど、多分……もう結婚してから十年ぐらいいは経ってると思う……」

声が震える。

二年も燻ぶっていた気持ちだが、少しずつ折れていくのが分かった。

積み上げてきた何かががらがらと音を立てて崩れる。

まともに桜花の顔も見れず、桜花の手を握ったまま真っ白いテーブルを見つめた。

「でもさ、まこと」

「？」

「あの部長の性格からして、奥さんがいることを隠すと思う？ しかも、まことが恋人はいないのか訊いたときは『いない』って答えたんでしょ？」

「……恋人は、ね」

「うーん。そんなに回りくどい言い方するかなあ。

部長だったら、絶対奥さんの話会社ですると思うんだけど」

彼女の言いたいこともわかる。

だが、ただか二年かそこらの付き合いでは「部長」の一部の側面だけを知るのが精いっぱい、自分たちの知らない彼の一面や過去があっても何ら不思議ではないだろう。

そういえば、よく考えたら部長のこと、なんにも知らないなあ。

好きな食べ物とか、趣味とか、休日の過ごし方とか……何も。

「前にね、部長、一人暮らしだって言ってるのを聞

いたことがあるの」

「えっ」

「だから多分……多分だけだね、奥さん、いないと思う。写真がなんなのかはわかんないけど……でも、きっと、まことが恋を諦める必要はないはずだよ」



私の名前は朝桐伊墨。

中小企業勤務、一応は営業部長を任されている。

年齢は四十後半。

もういい年だ。

自分はこのまま仕事をしながら年を取って、一人で死んでいくものだと思うって疑うことすらしていなかった。

彼が現れるまでは。

「一之瀬まことです。分からないことだらけで沢山の迷惑をかけてしまうかもしれませんが、どうかご教鞭のほどよろしくお願い致します！」

二十代とは思えないほどしっかりしていて、最初の印象は優しそうな子、だった。

そんな彼から淡い恋心を寄せられていると知ったのは、一緒に仕事を始めてからもうそろそろ一年が経過しようとしていた頃。

喫煙所に向かう途中にある給湯室から漏れていた声は、自分の足を止めるには十分だった。

「ねえまこと。まことって、部長の事、好きでしょ」

仲良くしているらしい同期の東くんにそう言われた彼は否定こそしていたけれど、その否定が本心ではないことを察するぐらいはできる。

伊達に四十数年生きていない。

自分だって人並みに恋をして、敗れて、……実つて。

四十数年分の経験があるのだから。

彼の気持ちを偶然とはいえ知ってしまった瞬間は、どうしたものかと困ったものだ。

思えば薄っすらと片鱗はあった。

目を逸らしてただけで。

だが若い子がある程度上の年齢の男に惹かれるのはある意味恒例というか当たり前のことで、きっと好みの別の人が現れたらこんなおじさんにはすぐに飽きてしまうだろうと気付かないふりをずっと続けていた。

あくまで、自分は上司で、彼はただの部下。

そう、思うようにしていた。

だけど相変わらず彼は、目が合えば嬉しそうに笑うし、自分を見かけたら嬉しそうに小走りで寄ってくるして、飽きる気配もない。

二年たった今でも。

というか、二年たった今になって、彼のアプローチ

チが随分と積極的なものになってきたことに困惑してしまっている。

彼の色素の薄い灰色の瞳を、髪を。

自信なさげに下げられた眉を。

つい目で追ってしまふ。

つまるところ、〃気になり始めてしまっている〃

のだ。

そしてついこの間、その〃気になり始めた〃という感情は、確実にそれ以上を望むようになってしまった。

体調不良に苦しむ彼を心配してお節介を焼いたら終電を逃し、最終的に泊まらせてもらうという不甲斐なさに加え、彼の匂いが充満したその部屋で大人しく眠りにつくなんてこと出来るはずもなく。

かといってベッドで眠る彼にどうこう、なんて度胸もなく……ただ彼のこと以外を考えながら、彼がすぐ近くで無防備に眠っているという現状を考えないようにしながら、朝日が昇ってくるのを待つことしかできなかった。

その日はアポなんてないのに着替えなければいけないからと言いつて逃げるように彼の家を出た自分。

発情期中の彼の匂いに当てられて立っているのもやっとなつたというのに随分と恰好つたものだ。だからそのまま、恰好つたままに居たかったのだけれど。

「あの……部長」

恰好つたままではいけないのはどうやら昔から変わっていないらしい。

だって、彼に声をかけられるだけで、こんなに心臓が煩いのだから。



「これ……」

恐る恐る差し出したそれを、部長は少し戸惑いながら受け取った。

色褪せた手帳。

表紙のすぐ後ろにポケットがあつたのでそこに写真を入れておいた。

「僕の部屋に忘れてましたよ」

「あ、ああ。ありがとう」

彼はにこりと笑みを浮かべて大切そうに手帳の表紙を撫でるとそつとジャケットの内ポケットにしまし込む。

その瞳にはありありと、誰かに向けられた優しく甘い感情が浮かんでいて、彼の脳裏に思い浮かんでいるはずのその相手には到底勝ち目がないことを悟ってしまった。

「……部長。奥さん、いらっしやるんですね」

その相手が。

この人にこんな顔をさせることができるその人が、
本当に本当に羨ましくて。

つい、意地の悪いトーンになってしまった。

「どうして隠してたんですか？ 言って下されば良かったのに」

彼の顔をまともに見ることができなくて、つい視線を逸らす。

この時、彼はどんな顔をしていたんだろう。

「……言っただろう。もう、諦めている、と」

「え？」

「写真、見たのかい？」

振り向くと笑顔の彼がいた。

いつも通りのはずのその笑顔がいやに寂しそうで、
自分の選択が間違っていたということを自覚する。

「君の思った通り、あの写真は妻との結婚式の写真だ。……もう、二度と会えないけれど」

「？ えっと」

「死別したんだよ。五年前。末期ガンだった。腫瘍が見つかった頃にはもう間に合わなくて」

彼は胸元をそっと手の平で撫でた。

顔から血の気が引いていくのがわかる。

とんでもなく無神経なことを言ってしまったということも。

「……ぶ、部長……ごめんなさい……っ！ 僕……」

！

「はは。いいんだ。君はきっとそんな顔をするだろうと思ったから話していなかったんだよ」

彼の声が脳裏に反響する。

吹っ切れたような、もう諦めがついたかのような、そんな声。

二人きりの廊下で、少しずつ西に沈み始めた橙色の世界が窓の向こうからこちらをじいと覗いている。その橙色を纏った彼は優しい笑みを浮かべていた。今すぐ駆けだしてその胸に飛び込んでしまいたくなるような、愛おしい笑み。

「君のそんな顔を、見たくなかったから」

どうして、そんなに期待させるような顔をするんですか。

諦めようと思ったばかりなのに。

勝ち目はないって、そう思ったばかりなのに。

写真を見て諦めようと思って、そしてその写真を大切そうにしている彼の表情を見てまた諦めようと思った。

諦めようと、思った、のに。

「部長。僕、部長に助けられてばかりですね」

突然の話題の転換に驚いたのか、部長はきょんとしている。

だけど、ここを逃したら、次はない気がしていた。

「仕事は勿論、発情期で苦しんだるときも……構わないことだって、出来たはずなのに」

彼は黙って聞いている。

「僕、いつの間にか部長の事、目で追ってました」

手が震えて、声も震える。

怖くて仕方がない。

「初めて二人で飲みに行った時も、部長は余裕たっぷり……そこがちょっとだけ憎らしくて」

本当は、こんな成り行きみたいな流れじゃなくて、もつとちゃんと余裕を持ちたかったのだけど。

「あの。部長、僕……部長のこと、」

「ま、待ってくれ！」

持ち得る勇気すべてを必死にかき集めて押し出そうとしたその言葉は、部長の声によって遮られた。視界いっぱいには部長の肉球が映る。

ふわふわした手の間から見える彼は、頬を上気させ、口元を押さえていた。

「……先に、私の話を聞いてくれないか」



きよとん、とした彼の顔をまともに見ることができず、顔半分を覆って目を逸らし、深く深く深呼吸をする。

これから彼が言おうとしているその言葉をそのまま言わせてしまうにはあまりにも情けない。

「君を目で追っていたのは、私の方だ」

今自分の顔は彼にどう見えているんだろうか。

少なくとも、格好よく映っているとはいえないだろうけれど。

「初めて君がうちの部に配属されたとき、素直に可愛らしい子だと思った。近所の子供に抱くような感情だったか」

あの初々しい挨拶を今でも覚えている。

一目惚れだった、なんて嘘は言わないが、好印象だったのは確かだ。

「君の仕事ぶりを見て、大人しいがしっかりしている子だと気付いた。同僚の失敗を笑顔でフォローしているのを見て、損得勘定抜きで誰かのために何かができる子だと気付いた」

視線が気になったのも、その頃。

「自分のミスには過剰に反省しすぎてしまうのは玉に瑕だけれど、失敗を受け止めて改善できる素直な子だと気付いた」

同僚と一緒に楽しそうなおその笑顔を、ずっと見ていたい、なんて一瞬でも思うようになった。

「そして、君に声をかけられることを嬉しいと思っている自分に気付いた」

気づいたうえで、目を逸らしていた。

気が付かないふりをしていた。

もう、失うのが怖かったから。

大切なものは案外簡単に手から零れ落ちていくことを知っているから。

「恰好を付けたくて仕事で成果を出そうと焦ってしまふのも」

妻を亡くして十数年、他にやることもなかったの
で殆ど八つ当たりのように仕事に熱量を注いだ。

本当に、愛していた。

失ってしまったなんて微塵も思っていなかった。

だから感情のぶつけ方を知らなかったのだ。

営業部部长という役職まで上り詰めることができたのは、妻のおかげだ。

「君の匂いに意識が朦朧としてしまいそうなもの」

今思えば、彼は妻に似ているんだ。

酷く失礼なことだけれど無意識に重ねてしまっていたんだろう。

大人しく控えめだが、周りをよく見ているし人に優しくできる。

雑念なく人の話を聞けるし褒められると素直に喜べる。

良くも悪くも等身大で裏表がない。

妻も、そんな人だった。

「私を見上げる君の視線に、喉が渴いてしまうのも」

だけど、成り行きとはいえブライベートにまで踏み込むようになってしまつて、ブライベートな彼と接するようになって、彼自身に惹かれていった。

夕方のネオン街をまるで他人事のようにぼんやりと見つめている横顔、切なさうに下げられる眉、空の色を吸って何色にも変化する灰色の髪、鏡のように澄んだ瞳。

アルコールが入ると少しだけ強気になるところ、無防備に他人の部屋のベッドで熟睡できるところ、随分と遠慮がちなところ。

あと、嘘を吐いたり誤魔化すのが下手なところ。すべてが、愛おしい。

「全部、君の所為だ」

彼の頬を伝った涙が足元に小さな水溜まりを作る。止め処なく溢れるそれを慌てて拭つて、彼の顔を覗き込んだ。

「だから、えっと、私の傍にいてくれないか？　その……恋人、として」



ずっと思っていた。

部長のあのふわふわの首元に、顔を埋めてみたいと。

あの大きな手で触れてほしいと。

日がな一日、少しだけ乾燥してガサついた肉球を触っていたい。

「い、一之瀬くん……っ」

部長の首元は本当に暖かくて、毛は肌をさらさらと撫で上げていく。

息を吸うと今までよりもずっと濃くて強いタバコの匂いがして、でもそれすら愛おしくて。

「部長……好きです」

その告白は、営業部部长という肩書を持つ彼にしては随分自信なさげで、本当に慎重に言葉を選んでくれたんだと分かった。

その頼りない様子が、たまらなくて。

思わず胸元に飛び込んでしまっただけこれ数十分。もうすぐ定時になる。

確か今日のアポの帰り時間、そろそろの人もいる。だから、廊下のだ真ん中でこんなことをしている場合ではないんだけど。

「大好きです、部長」

ふいと見上げると、彼の顔は真っ赤になっていて。

先程からずっと両手は宙を漂っている。

抱きしめてくれて構わないのに。

「部長、顔真っ赤ですね」

「すまない。こういうのは久しぶりだから、その、勝手がわからなくて」

彼はそういつて目を逸らすと、小さく息を吐く。

「情けないな。本当に」

「僕は、情けないところも含めて全部好きですよ」

二年も大事に大事に育てた恋心は、今まで消極的に生きてきた自分をここまで積極的に変えてしまうほど膨らんでいたらしい。

自分の口からこれだけの言葉がぼんぼん出てくるとは思いもしなかった。

恋は人を変える、とよくキャッチコピーやら何やらで使われているけれど成程たしかに的を射ている。

「一之瀬くん」

「はい」

「抱きしめてもいいかい？」

「……………はい」

その数分後、忘れ物を返してくると言ったきりオフィスに戻らなくなった自分を心配して探しに来てくれた桜花とばったり遭遇し、根掘り葉掘り聞かれ

ることになるのだけれど、それはまた別のお話。

あとがき

お手に取って頂きありがとうございます。

うちの年の差CPは、果たしてあなたの性癖に刺さりましたでしょうか？

この作品の始まりは自分自身の性癖である「獣人 × 人間」を実現させるため設定を書きなぐったことからでした。

設定を詰めていくに連れてオメガバースチックになってしまいましたが、完全にオメガバにしようと思える設定が多々ありましたのであくまで「自分の世界観」で書くことに。

例えば、あくまで同性結婚では子供を作ることが出来ないという設定はオメガバースでは消えてしまいます。

イセにも入れたい設定をすべて合集めた結果、こだわりが色濃く残った世界観となりました。途中何度もオメガバースで書き直そうとか、これなら獣人ではなく普通の人間でもいいんじゃないかと悩みじが折れかけましたが、やっぱり獣人特有のふわふわの毛の表現とか肉球のぷにぷに感とかが書きたくて始めた執筆だったのになんとか踏ん張ることができました。

詳しい世界観説明は「もふもふ天国!世界観説明ブック」をぜひご覧ください。

もしこの世界観を気に入ってくださったのなら、ぜひ別の作品もお手にとって頂けると嬉しいです。それでは、また違う物語であなたと出会えることを楽しみにしています。



Booth



サークルHP



Twitter

著 絵

Email shimajiro.work.only@gmail.com

初版発行日：2020年10月27日

第二刷発行日：2022年05月23日

印刷会社名：ちよいのま印刷